

ACRYLART

アクリラート別冊2014



The
Scholar 20
Perspective

The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊2014



ごあいさつ

ホルベイン・スカラシップは、この度第27回を修了（2013年）し、これに伴い奨学生20名の紹介と記録を目的に本誌を発行いたしました。

ホルベインという社名は、ドイツ・ルネッサンス期の代表的な画家ハンス・ホルバイン（1497-1543）の名に由来するものです。ハンス・ホルバインは、単なる肖像画を超えて被写体の人間性までも描く画家で、後に宮廷画家となり、豊かな色彩の傑作を数多く残しています。

弊社は創業より100年以上が経ち、絵の具の種類や色数はかなり増えてきていますが、原材料では天然素材の入手困難な状況や環境問題などにより大きく様変わりをしています。作家の表現方法も、色材のみならず、基底材や描画材料でも画材以外の様々な素材が取り入れられ、従来の素材と併用しての作品もあります。こうした素材や表現方法の変化を絵具製造会社として現状を把握することは、作品との出会いや作家との交流が重要です。ホルベイン・スカラシップを実施してから28年を経て、1,119名のスカラシップ奨学生の皆様との関わりを大切にしてまいりました。多くの作家との交流によってその表現の中から色材の立場を探求しつつ、メーカーとユーザーとの相互の関係性を作り上げることが、重要であると考えております。一人の作家との交流は、美術館や画廊、美術関係者などへと当然繋がりも広がっていきます。それはたいへん貴重なものであります。

表現者である作家の素材へのこだわりと工夫を、提供者であるメーカーも認識することが必要であり、作家もまた素材を認識し熟知することがより優れた創造へと繋がってゆくものと考えます。

第27回奨学生の作品集も、表現と素材との関わりを作家のことばと共にご覧いただけましたら幸いです。

2014年7月

ホルベイン工業株式会社
スカラシップ実行委員会

The
Scholar 20
Perspective

Contents

第27回 燿学者 (五十音順)

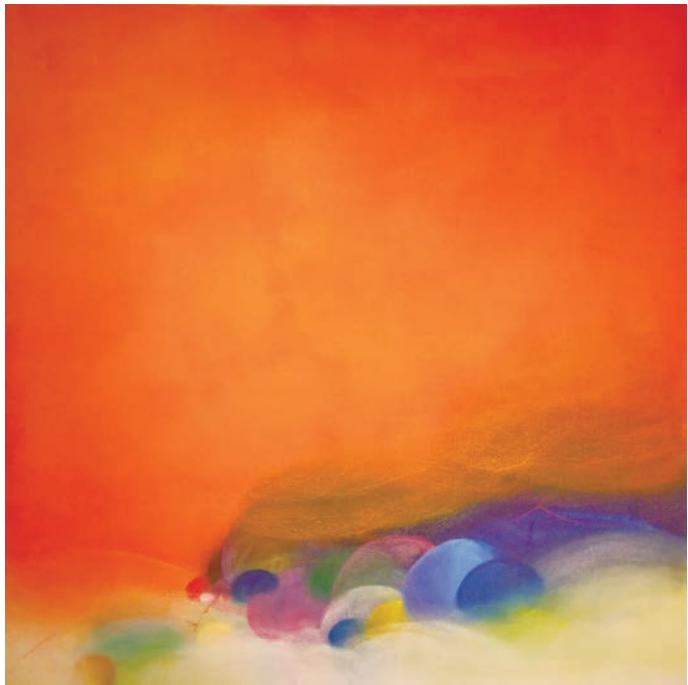
青木恵美子	AOKI Emiko	12 · 34
青木 豊	AOKI Yutaka	13 · 37
阿部未奈子	ABE Minako	14 · 40
伊庭広人	IBA Hirohito	15 · 43
大庭大介	OHBA Daisuke	16 · 46
小川晴輝	OGAWA Haruki	17 · 49
小川泰生	OGAWA Yasuo	18 · 52
小野有美子	ONO Yumiko	19 · 55
上脇田直子	KAMIWAKIDA Naoko	20 · 58
木下令子	KINOSHITA Reiko	21 · 61

黒宮菜菜	KUROMIYA Nana	22 · 64
児玉麻緒	KODAMA Asao	23 · 67
坂口竜太	SAKAGUCHI Ryuta	24 · 70
佐々木耕太	SASAKI Kota	25 · 73
原 夕希子	HARA Yukiko	26 · 76
ヒラカワカツヤ	HIRAKAWA Katsuya	27 · 79
古橋 香	FURUHASHI Kaori	28 · 82
村山之都	MURAYAMA Shitsu	29 · 85
森 洋史	MORI Hiroshi	30 · 88
わにぶちみき	WANIBUCHI Miki	31 · 91

The
Scholar20
Perspective

Works

第27回奨学者の作品



青木恵美子

とめどなく

パステル、油彩、アクリル、キャンバス

100.0×100.0cm

2013年



青木 豊

untitled

アクリルラッカースプレー、アクリル、綿布、パネル

162.0×162.0 cm

2013年



untitled (部分)



阿部未奈子

Scene no.36

油彩、キャンバス

130.3×130.3cm

2013年

photo by 岡野圭



伊庭広人

展望 230

油彩、アクリル、石膏地、寒冷紗、パネル

162.1×162.1cm

2014年



大庭大介

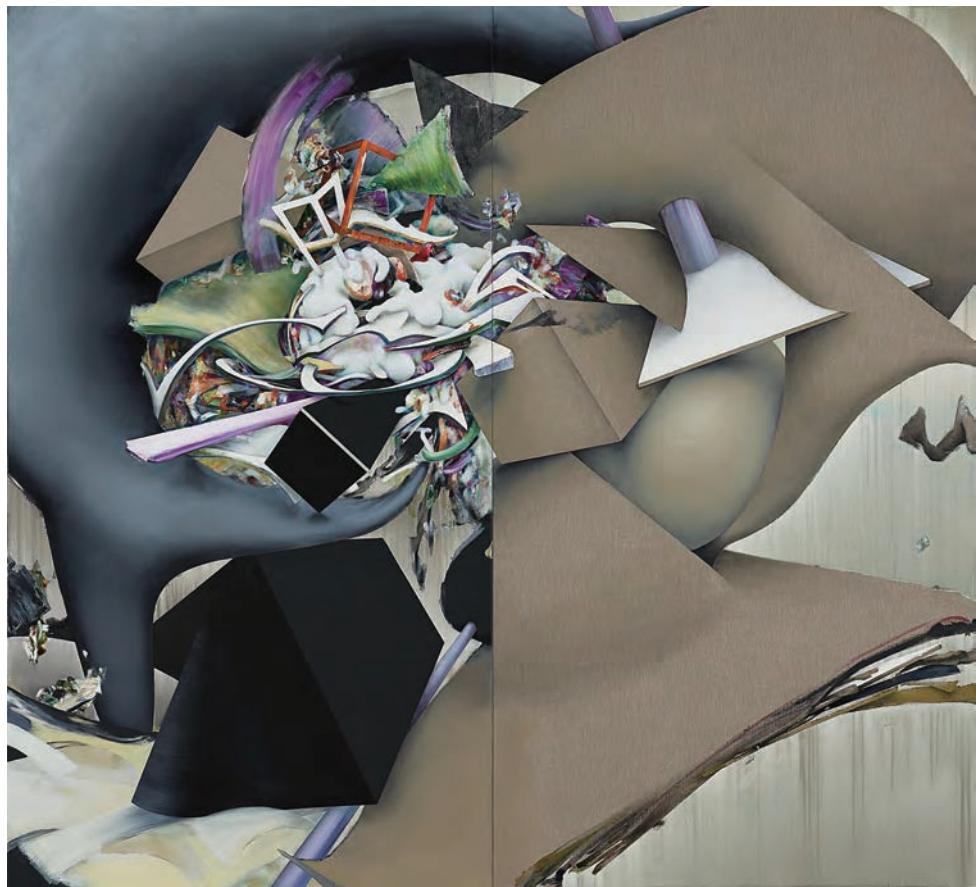
LOG(Kegon Falls)

アクリル、綿布、パネル

225.0×180.0cm

2013年

photo by 表 恒匡



小川晴輝

呼応 III

油絵具、水性アルキド絵具、黒綿布、麻布

248.0×272.4×6.0cm

2013年



呼応 III（側面）



小川泰生

Memory trace 2014-I

パラフィンワックス、透明水彩絵具、

モデリングペースト、ワトソン紙、木製パネル

102.4×102.4cm

2014年



小野有美子

Foliage

油彩、エマルション、麻布

194.0×194.0cm

2014年



上脇田直子

a scene

ペン、アクリル、ジェッソ、綿布、パネル

45.5×53.0cm

2013年



木下希子

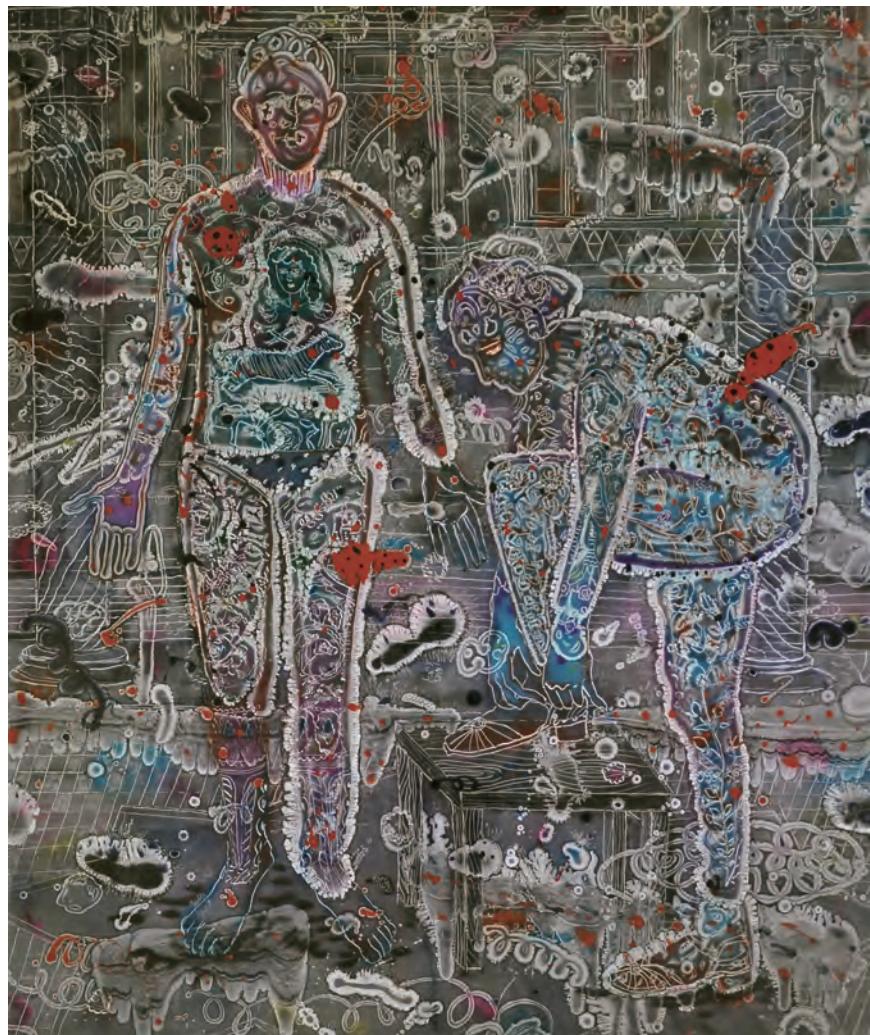
あとかた

アクリル、日焼けさせた紙

34.5×45.5cm

2013年

photo by 田中雄一郎



黒宮菜菜

肌にまとう柄 #4
油彩、メディウム
キャンバス、木製パネル
194.0×162.0cm
2014年



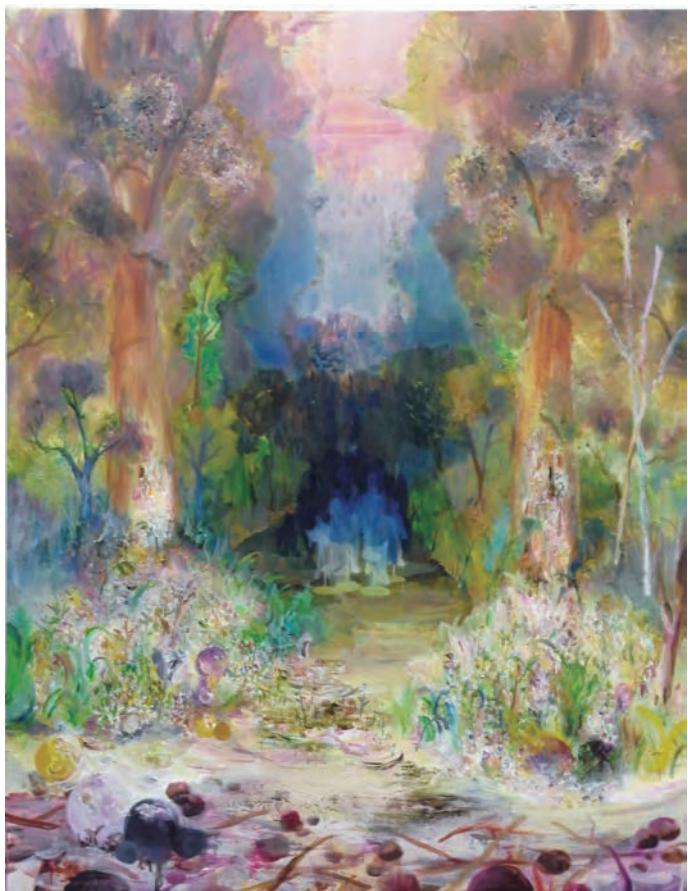
児玉麻緒

チュー

油彩、キャンバス

194.0×162.0cm

2013年



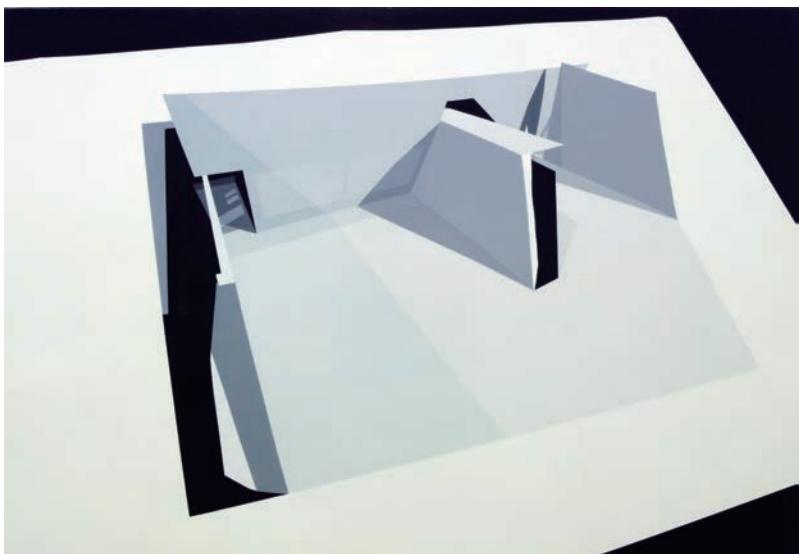
坂口竜太

青のいる風景

油彩、キャンバス

145.0×112.0cm

2013年



佐々木耕太

Studio

油彩、キャンバス

80.3×116.7cm

2013年



原夕希子

瞬

油彩、キャンバス

97.0×145.5cm

2013年



ヒラカワカツヤ

キャスト

アクリル、錦布、パネル

137.0×137.0cm

2014年



古橋 香

PLUTO を 訪ねる

油彩、綿布、パネル

130.0×162.0cm

2014年



村山之都

火事

油彩、キャンバス

162.0×162.0cm

2014年



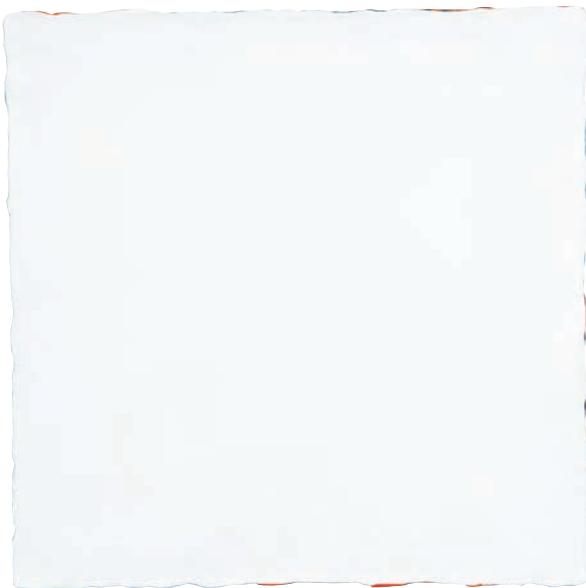
森 洋史

The End

メッキ、UV硬化インク、ウレタン、
油彩、アクリル、アルミハニカムパネル

91.0×154.0cm

2014年



わにぶちみき

Beyond 02

アクリル、キャンバス

60.0×60.0×3.0cm

2014年



Beyond 02 (側面)

The
Scholar20
Perspective

Report

第27回奨学者のレポート

青木恵美子

純粹な世界

「純粹無垢な世界が見てみたい。」それが私の制作の動機です。時間、空間を超えて、物質的ではない普遍的なものを表現できたらと思い、制作をしています。さまざまなものに満ちた現実を生きる中で感じたことや考えたことが自己の内部に沈潜し、やがて色やかたちそのものとなつて、まるで音楽のように互いに響きあい、ひとつつの画面、作品となつていきます。

うに描いています。上の色面は理想（イデア）であり、有機形態は現実であり、それが響きあいながら存在し成り立っています。日常生活の中でもがいている私にとって、理想と現実とのこのバランスはとても重要なものであり、つねに極度の緊張感をもつて描いています。色彩は光であり生命の象徴でもあるので、色の持つ純度は生命感の強さに繋がると思い描いています。

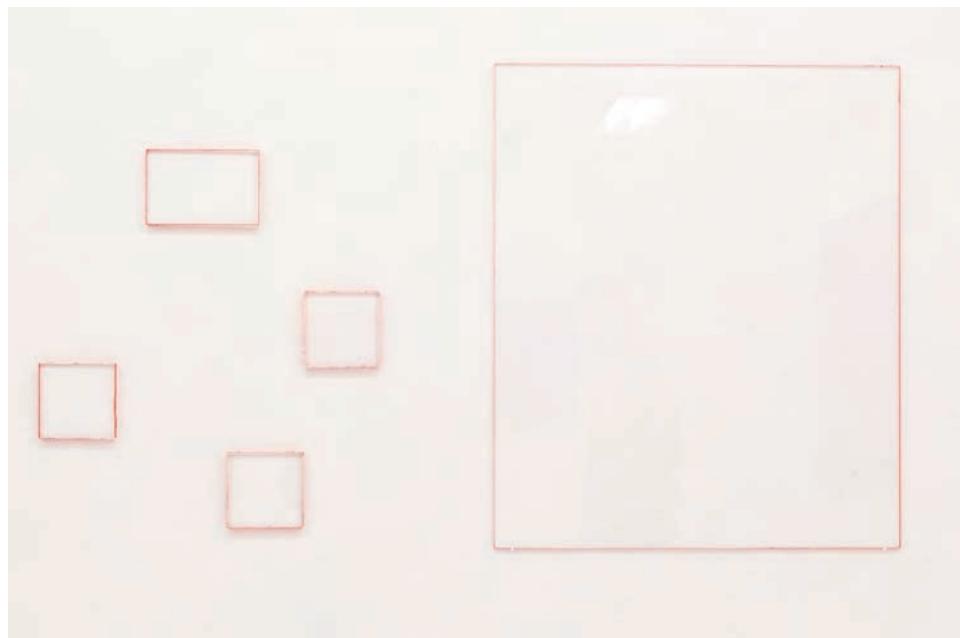
顕現」と、アクリル板の四方の側面に絵の具を彩色しただけの「PRESENCE」—現前—という2つのシリーズで主に制作を進めています。一見すると相異なるようですが、2つとも私が考える「絵画」(理念としての)の中から生まれてきた作品です。

[Epiphany]とは日常の中でも体験して感じるどこか直観的で超越的なものが、私という視点(フィルター)ないし、場を通じて、まさに顕現してくる有様を象徴的に描写したもので。構図は大きな色面が上にあり、下に生命感あふれる有機形態を調和するよ

が補い、側面のわずかな彩色が絵画の基底と成り得るところに私自身はとても純粋で神秘的なものを感じています。

どちらも支持体に絵の具で彩色していますが、「Epiphany」は私にとっての純然たる絵画であり、色が作り出す空間が外部の空間との融和を試みるのに対し、「PRESENCE」は絵画の不在、もしくは不在としての絵画に外部空間を取り込み、いわば影を本体として現前（存在）せしめるというところがやや概念的な印象を与えるかもしません。

私の作品どちらにも共通しているのは、見ることによるよりは体験する絵画の要素です。私の作品は他者や外部を取り込みつつ、常に変化しつづけるものであつて欲しいと思っています。そうすることで、作品を見てくださる方が日常の奥にあるイデアルな世界と向き合つきつかけが生まれることになつたら、それはどんなに素敵なことかと思うのです。



PRESENCE 1

油彩、アクリル、アクリル板

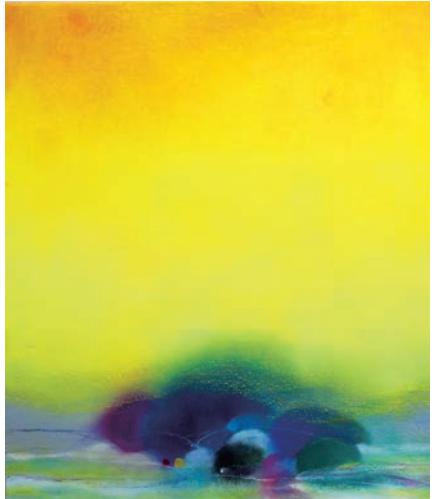
右: 65.0×55.0×1.0 cm

左: 10.0×15.0×1.0 cm (1枚)

10.0×10.0×1.0 cm (3枚)

2012年 (組み作品)

永遠に
パステル、油彩、アクリル、キャンバス
55.0×46.0cm
2013年



青木恵美子

1976年 埼玉県生まれ
2008年 多摩美術大学造形表現学部造形学科油画専攻卒業
2010年 多摩美術大学大学院美術研究科油画研究領域修了

個展

2014年 **Gallery Forgotten Dreams／東京（江東区）にて10月18日～11月16日迄開催予定**
青木恵美子洋画展 東急百貨店たまプラーザ店アートサロン／神奈川（横浜市青葉区）にて9月4日～10日迄開催予定
～春のように～ 青木恵美子展 東邦アート／東京

2013年 希望のささやき - Whispering hope - Gallery Forgotten Dreams／東京

2012年 沈黙の終わりに 藍画廊／東京

2010年 青木恵美子展・静かな始まり ガレリア・グラフィカbis／東京
青木恵美子展 ANOTHER FUNCTION／東京

グループ展他

2014年 「A KAWAII and Fantastic World」 AHAF2香港2014 Marco Polo Hongkong Hotel／香港[中国]
INNOCENT～抽象の彼方～ 日本橋高島屋美術画廊／東京、大阪高島屋／大阪

2013年 第8回大黒屋現代アート公募展 大黒屋／栃木
鮮やかに… Shonandai MY Gallery／東京
GENOMICA 東邦アート／東京
三越美術特選会「始点×視点」若き創造者たち 日本橋三越本店／東京、JR大阪三越伊勢丹／大阪
忘れられた夢 Gallery Forgotten Dreams／東京
たいせつなもの展 靖山画廊／東京

2012年 あいちアートプログラムアーツ・チャレンジ2012 愛知芸術文化センター／愛知
シェル美術賞 アーティスト・セレクション 国立新美術館／東京

2011年 グループ展 鎌倉カトレヤギャラリー／神奈川

2010年 シェル美術賞展 代官山ヒルサイドフォーラム／東京 ('09)
トーキョーワンダーウォール公募2010入選作品展 東京都現代美術館／東京
第29回損保ジャパン美術財団選抜奨励展 損保ジャパン東郷青児美術館／東京
KAMINOGE 2010 松屋銀座画廊／東京
グループ展 新宿プロムナードギャラリー／東京 ('08, '09)

2008年 七色展 ギャルリー志門／東京
AOBA+ART+EAT たまプラーザ商店街／東京

2007年 とよた美術展07 豊田市美術館／愛知
第6回奄美を描く美術展 田中一村記念美術館／鹿児島

2006年 Tremolo展 フォルム3丁目画廊／東京
muon展 ギャルリー志門／東京

不在の不在

軽快な音の運動。降りそそぐ雪に映える鮮やかな赤と明滅する光の集合。クリスマスが近づくと、街中には大勢のサンタクロースが現れる。インターネット上にはマスター・ピースのサンタクロースを追跡するコミュニティサイトが立ち上がり、世界中でその動向を伺い知ることができる。しかし数日の内に熱狂は過ぎ去り、サンタクロースは全てを置き去りにしたまま混沌の内側へと帰つてゆく。情報の伝達速度が日々加速するまさにその内側で、今や私たちは経験を必要としない社会に生き、日頃から幻と対等に付き合つてゐる。

実在と仮象という二項において、絵画もまた不明瞭な(だけれども確かなる)位置に存在している。私はよく制作にスプレーを用いるが、その特性から光跡との意識で扱つてゐる。このことを端的に指示示す作品として、遺伝子構造をモデルにした折り紙の作品がある。この作品は折り目をつけて開いた紙に、一方向から螢光色を噴射するという方法をとる。色彩が暴き出した光の筋は、視点・立ち位置により見え方が異なる

(あるいは見えなくなる)。加えて作品裏面にも色彩を塗布することにより作品を支持している壁との関係性を同時に暴露する。また同様に、フレーム化したシルバーの作品シリーズがある。プロセスとして以下が挙げられる。

白く平滑にした下地のキャンバスに、同じ色材を用いて山を描く。照明の下同一色の白を重ねていくため、当然ながら描いている最中は何を手がかりに描き進めて良いのかよくわからない。そこで、筆致の結果として現れる物質性が照明によって得られる陰影を頼りに、自身の身体は作品の周辺をうろうるとさまよい、描いた(はず)の対象を再認識しながら、山(のよくなもの)を描いてゆく。そうしてできあがつた白い画面にシルバーのスプレーで層を重ねる。これら的过程を経て初めて像が焦点を結ぶ予兆が現れるが、同時にそれは一瞬の出来事であり消失する。描いた(はず)の対象と積層されたシルバーの膜は共に実在と仮象の両義を備え、正確に知覚することが困難だからだ。この事柄は遺伝子構造が同じ螺旋上に

ありながらも永遠に交わらないことと相似している。しかし同時に、作品に対しても視点や立ち位置を意識的に変化させる行為により、私たち客体によつて関係性を結ぶことを可能とし、描かれた対象を無化させも現前させもする。このことから絵画を知る為の情報は往復、交換(変換)可能なものとなつた。このような方法をもとに私は実在と仮象の中間領域／本質を現前させることを試みている。

完成した作品は時として私の視界から文字通り消失する。そんな時は大抵、外光が作品に当たる、もしくは周辺環境に由来し作品に何者かが映り込む、といったように作品が光へ誘われる時だ。眼前にはホワイトホールが広がっている。絵画の正面以外にも人が立てるべとすれば、それは絵画(＝世界)を人間の手に取り戻す行為になり得ると期待している。



untitled
アクリルラッカースプレー、紙
29.7×21.0cm
2013年
photo by Takaaki Akaishi

untitled
アクリルラッカースプレー、アクリル、キャンバス
53.0×45.5cm
2011年
photo by Takaaki Akaishi



青木 豊

1985年 熊本県生まれ
2008年 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域卒業
2010年 東京造形大学大学院造形研究科美術専攻領域修了

個展

2014年 sprout curation／東京（江東区清澄）にて8月2日～9月6日迄開催予定
2013年 BREAK THROUGH IN A GREY ROOM sprout curation／東京
2012年 －外の部屋、中の庭－ 熊本市現代美術館／熊本
2011年 multiprime hiromiyoshii／東京

グループ展他

2014年 絵画の在りか 東京オペラシティ アートギャラリー／東京
2013年 rgb+ exhibition vol.5 絵画専攻助手展 東京造形大学内 zokei gallery／東京('11、'12)
042 art area project 2013 スーパーオープンスタジオ REV／神奈川
2012年 REV OPEN STUDIO Announcement of the New Artists REV／神奈川
Pandemonium XYZ collective／東京
2011年 夢で逢いましょう sprout curation／東京
MAGIC BLACK hiromiyoshiroppongi／東京
2010年 東京造形大学絵画棟クロージング展 comaboco 東京造形大学内旧絵画棟／東京
REV OPEN STUDIO REV／神奈川
Painting on the move hiromiyoshii／東京
2009年 Art Nova Art Basel Miami Beach／マイアミ[U.S.A.]
SET ON THE PLATFORM SPACE/ANNEX Gallery／東京
output 東京造形大学内 zokei gallery／東京
LISTE 09 WARTECH／バーゼル[スイス]
アートフェア東京 東京国際フォーラム／東京
ARTS CHALLENGE 愛知芸術文化センター／愛知
2008年 Emerging Directors Art Fair - ULTRA 001 スパイナルガーデン／東京
青木豊／佐藤修康 hiromiyoshii／東京
101 TOKYO Contemporary Art Fair 2008 旧練成中学校／東京

阿部未奈子

ABE Minako

なぜ風景を選択するのか

表現することは自分への問いかけ、確認から始まっています。

おそらく風景は世界中の誰をも包囲し、私をも包み込みニュートラルに映じる大きな媒体だと思います。

風景から何か、大きな力を感じる時、それはまるで限りある私たちを包み込むための大

きな装置、仕掛けのように思えるのです。私は映す風景は名勝であつたり奇観である必要はなく、むしろ私が幼い時から一緒にいた空気を持った風景、ゆつくり風が流れ私を生かしてくれる大きな器としての風景です。

私はそこに、時にアルプスのような、時に日本の、いざれにせよ私を投影する匿名の場所に過去の記憶や憧れを含む私自身を見出せます。

そこで私が表現するのは風景のディテールではなく私の感情の揺れでもあります。

目の前にある風景、そこに風景のもつ本質が潜んでいるのではないかと考える時に、そのディテールには全く私を投影出来るも

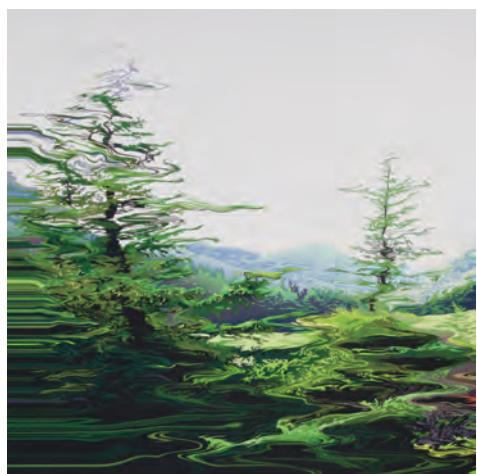
のではなく、むしろそのディテールを飛ばした所に何かがあるように思います。それらディテールは風景上で何かを隠す粉飾道具のような役割をしている気がするのです。

描く風景を選択する時は写真、雑誌などを利用して偶然に手元に落ちてきた風景を優先しています。

私の解釈以上の風景と出会うために、選択した風景のディテールをP.C.の力と恣意的な操作で飛ばす作業をします。写真とは直なもので、手を加えたにもかかわらずその風景の空気の含有量をそのまま残してくれます。それを壊さないように出来るだけオートマティックにローラー、マスキングテープを使いもう一度、私を通して元の風景に返していきます。そこにはもともと風景が持っていた大きな風の量が現れ、またその風景の色彩も含有量を違わずに現れてきます。

私は風景をただ再現するのではなく、ディテールに邪魔されず、その風景の本質、つまり私たちを包み込む空気、風、生きるこ

とを包围する何かを再現しようと試みています。



Scene no.41

油彩、アクリル、キャンバス

各194.0×194.0cm

2013年

photo by 岡野 圭



Scene no.32
油彩、キャンバス
130.3×130.3cm
2012年
photo by 岡野圭



阿部未奈子

1974年 千葉県生まれ
2000年 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業
2004年 東京藝術大学大学院美術研究科修了

個展

2013年 project N 51 阿部未奈子展 東京オペラシティ アートギャラリー／東京
2010年 ベイスギャラリー／東京
2008年 ベイスギャラリー／東京
2006年 ベイスギャラリー／東京

グループ展他

2014年 VOCA展2014 現代美術の展望－新しい平面の作家たち 上野の森美術館／東京
2007年 Landschaft ヴァイスフェルト／東京
Young Japanese Landscape ミュージアム・オブ・ヤング・アート／ウィーン[オーストリア]

生きること

生きていると、おのずと構図が見える。

を見失わない。心に浸透しないものはいら
ない。軸足はそこにはない。

“描くこと”は、生きることを問う。

“時代”が目の前に現れる。

時代と日々の生き様が作品になっていく。

時代と向き合う己の精神の在りようが、あ
らわになる。

私にとって絵画とは、

使い捨ての新しさやオモシロさではなく、
“この時代を生きる、切実な足跡”であ
る。

〔真 善 美〕

一生をかけて表現するものは、この他に
ない。

時代は危うく浮遊する。

薄っぺらな足元は頼りなく、日々危機感を
感じずにはいられない。

様々な犯罪が起こる現代社会で、アート
も短絡的で使い捨てか。

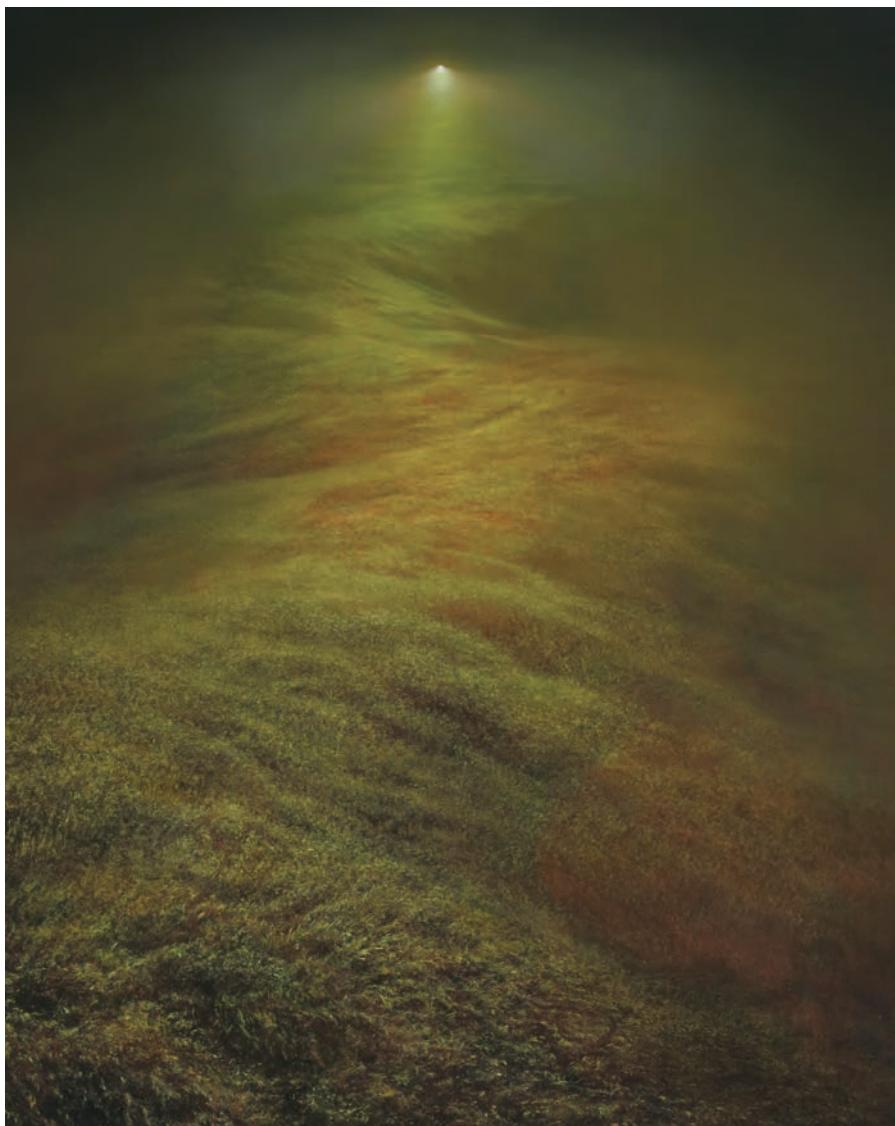
流行の仲間入りをしない。オモシロさに
ブれない。めずらしきに飛びついて、本質

しかし、この状況で初めて気づくことも
ある。生まれる作品がある。形作られる精
神がある。感謝すべきこと、愛でるべき美
にあふれている。

後は天に委ねて、穏やかな態度をとる自
由がある。不安も後悔も焦りもなく、全て
受け入れ、静かな覚悟で歩み続ける自由が
ある。困難すらエネルギーに変えて、笑つ
て飛び込んでゆくことも選択できる。

光は常に、私たちに道を示している。

衝動に突き動かされるよう現れた画面
に、核心を問いただすようにして描き続け
る。いつか、一生を懸け、描き残す作品が、
国境も時代も超越し、時代を懸命に生きる
人々の、“勇気”や“希望”、“救いの力”
になりえるようになる。



展望 198 明日への架け橋2011
油彩、アルキド樹脂、キャンバス布、板、木枠
162.1×130.3cm
2011年

境界の風景
キャンバス、油彩
162.0×194.0cm
2010年
photo by 末正真礼生



伊庭広人

1968年 滋賀県生まれ
1993年 京都精華大学美術学部洋画学科卒業

個展

2014年 永井画廊／東京（銀座）にて9月1日～6日迄開催予定
2008年 **近江八幡市立かわらミュージアム／滋賀**
2007年 アートスペース東山／京都
2006年 新生堂／東京
2004年 清須市はるひ美術館／愛知

グループ展他

2014年 公募日本の絵画2012 入賞・入選者 新作展 永井画廊／東京
上野の森美術館大賞展 上野の森美術館／東京、京都文化博物館／京都 ('98、'99)
2013年 小磯良平大賞展 神戸市立小磯記念美術館／兵庫、上野の森美術館／東京
青木繁記念大賞西日本美術展 石橋美術館／福岡
雪梁舎フェンツエ賞展 雪梁舎美術館／新潟、東京都美術館／東京 ('99、'00～'05、'09～'12)
京展 京都市美術館／京都 ('90、'92、'93、'95、'97～'99、'01～'04、'06～'12)
2012年 京都美術工芸ビエンナーレ 京都文化博物館／京都 ('08)
きたかみトリエンナーレ 北上市市民交流プラザ／岩手 ('09)
あさご芸術の森コンペティション あさご芸術の森美術館／兵庫 ('06)
日本の絵画2012 永井画廊／東京
2011年 富嶽ビエンナーレ 静岡県立美術館／静岡 ('09)
2010年 さかいでArtグランプリ 坂出市民美術館／香川 ('02～'05、'09)
ビエンナーレKUMAMOTO FINAL 入賞作品展 熊本県立美術館／熊本 ('08)
2009年 北陸中日美術展 金沢21世紀美術館／石川 ('01、'03、'04、'08)
2005年 新鋭美術選抜展 京都市美術館／京都 ('02)
京都府美術工芸新鋭選抜展 京都文化博物館／京都
両洋の眼展 日本橋三越本店／東京、田辺市立美術館／和歌山、三原リージョンプラザ／広島、八戸市美術館／青森、
河口湖美術館／山梨
天理ビエンナーレ 天理教会本部／奈良 ('01、'03)
夢広場はるひ絵画ビエンナーレ 清須市はるひ美術館／愛知 ('03)
2004年 とよた美術展 豊田市美術館／愛知
新生展 新生堂／東京 ('02)
2002年 関口芸術基金賞展 柏市民ギャラリー／千葉
2001年 池田満寿夫記念芸術賞展 東京フォーラムAギャラリー／東京、大阪府立現代美術センター／大阪
2000年 京都美術工芸展 京都文化博物館／京都

大庭大介

OHBA Daisuke

関係／絵画

「絵画、それは一見、底が見えそうな沼のようであり、その中に足を踏み入れたとたん、それは深く底が見えない。それらは、ある瞬間立ち上がり、ある瞬間、消え去る。それはまるで、この世とあの世をつなぐ窓のようだ。」

絵画制作における構造を考えた時、絵画とは何かしらのイメージ（空間、形、色／光、物語）を何かしらの道具を行為や身体を通して、何かしらの物質が時間を伴つて、

それらを支持体の平面の上に重ねられた物体／状態である。その物体の表面には色彩や絵の具、物質感、技術を通して制作者の様々な思考や試行錯誤が巡らされる。そして、その物体はどこかの空間の中で光をまとったモノとして鑑賞者は対峙する事になる。

それらは描かれたイメージを見るのか、平面としての物体を見るのか、もしくは、その両方を見るのか、そのような、領域の中、縛られた枠を逸脱し絵画を語るのか、枠を逸脱せずにルールの中で絵画を語るの

か、制作者は絵画制作の選択を迫られる事になる。絵画としての前提を考えた時、それを絵画、至らしめるものであるならば2次元空間と枠からは逃れられないのである。領域を限定された構成要素によつて形作られていく絵画は複雑な思考戦略を必要とするゲームのようだ。やり尽くされたと言われる絵画の方法論や歴史の積み重なりを前提とした時、現代でどのような編集や更新が今後可能だろうか？

私の作品の核になるテーマは「関係、変化、時間、光、空間、身体」だ。私たちの生活は常に何かの影響や関係により結果が変わる。例えば目の前に壮大な山がある。それは季節とともに山肌を変化させる。それらは永遠に続くかのように思えるが、それもまた変化し続ける。それらを眺める私の身体も歳をとる。それは宇宙規模で考えればそれらは繋がり変化し、続いていく。

私の作品の特徴として、光によつて色彩が浮かび上がる偏光パール絵具を使用しているが、偏光パールの特性上、光が当たら

なければ、色彩の認識は生まれない。それらの効果は一枚の絵画制作において三つの絵画空間を作り出す事になる。一つ目の空間は光の空間であり、二つ目の空間は影の空間、三つ目が光と影の間の空間だ。

制作をする上で、常に「光と影と間」の空間を同時に考える。「光と影と間」の空間が関係する事で鑑賞者は鑑賞した位置や距離により、絵画空間の移ろい、消え去りを体感する。それは結晶化された切り取られた時間を見るのではなく常に変化する時間を体感する事になる。絵画の機能として、ある事象や対象を恒久的に留める媒体だとしたら、私の絵画は絵画と言えるのか。

私は絵画を前提とした絵画のようなものを作りたい。それは時の流れの中で揺らぎを持つような存在として。



LOG(Rock)

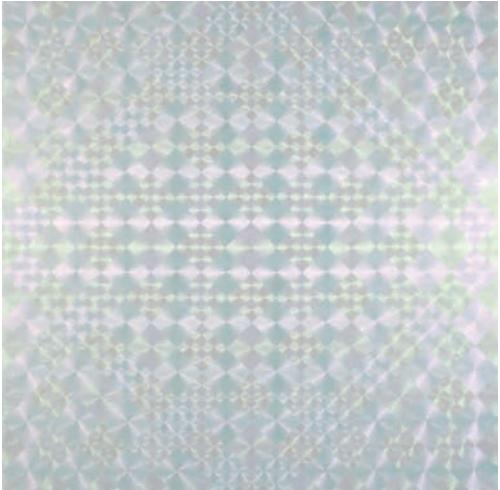
アクリル、綿布、パネル

150.0×180.0cm

2013年

photo by 表 恒匡

SPIRAL(transformation)
アクリル、綿布、パネル
180.0×180.0cm
2012年
photo by 表 恒匡



大庭大介

1981年 静岡県生まれ
2005年 京都造形芸術大学美術・工芸学科洋画コース(総合造形)卒業
2007年 東京藝術大学大学院美術研究科油画研究領域修了

個展

2012年 大庭大介個展 SCAI THE BATHHOUSE／東京
2011年 The Light Field 大和日英基金／ロンドン[イギリス]
2009年 The Light Field - 光の場 - SCAI THE BATHHOUSE、magical,ARTROOM／東京
2006年 LABYRINTH magical,ARTROOM／東京、ART ZONE／京都

グループ展他

2013年 日昨之島(The Islands of the Day Before) 国立台北芸術大学開渡美術館／台北[台湾]
flowers～一斉に芽吹く春の花のように～ 十和田市現代美術館／青森
TRICK-DIMENSION TOLOT／東京
2012年 超群島 ライトオブサイエンス 青森県立美術館／青森
Emotional Material 3331 arts chiyoda／東京
超群島 HYPER ARCHIPELAGO展 EYE OF GYRE／東京
2011年 堂島リバービエンナーレ2011 堂島リバーフォーラム／大阪
TOKYO FROUNT LINE 2011 3331 arts chiyoda／東京
2010年 時の遊園地 名古屋ポストン美術館／愛知
data and vision AKI GALLERY／台北[台湾]
VOCA展2010 現代美術の展望－新しい平面の画家たち 上野の森美術館／東京
NEW WORLD island／千葉
2009年 戦争と芸術III -美の恐怖と幻影- 京都造形芸術大学ギャルリ・オープ／京都
2008年 BEAMING ARTS #001 INTERNATIONAL GALLERY BEAMS／東京
風景の中のフウケイ 旧マッケンジー邸／静岡
THE ECHO ZAIM／神奈川
Japan Now Inter alia Art Company／ソウル[韓国]
ヴィヴィッド・マテリアル 東京藝術大学／東京
2007年 Oコレクションによる空想美術館 トキヨーワンダーサイト本郷／東京
混沌から躍り出る星たち2007 スパイラルガーデン／東京
something as if we do cafe parlwr／愛知
イリュージョンの楽園 MA2ギャラリー／東京
ART AWARD TOKYO 2007 行幸地下ギャラリー／東京

境界を越えて

私は、絵画を中心に立体やインスタレーションなども制作をしています。自分の仕事を一言でいうならば「境界を越えてお互いの領域を行き来する蠢き」だと思います。

また、絵画においていうならば「虚と実を行き来する蠢く関係」といっていいでしょ。絵画というものはどのような視点で見るかで様々な捉え方ができると思います。

例えば、窓として捉えること、平面として捉えること、側面を含めた立体として捉えること、絵画以外の周りの空間を含めて捉えることなどが思い浮かびます。私はこの話でいうと、側面を含めた立体や絵画の周りの空間を含めて捉えることに興味があります。

具体的には、私は絵画を描くときに側面まで描きます。意図としては描かれたものと支持体が切り離された関係にならないようにお互いを繋げるような意識をしています。また、支持体の物質性を尊重するために最低限の処理はしますが布地ができるだけそのままの状態で描けるようにしています。そうすることで、布地の質感や色を水墨画で余白を残すように活かすことが出来

ます。そして木枠の厚みを市販のものより厚くして正面に描かれるイリュージョンに呑まれないように支持体が同時に認識できるように意識をしています。

この支持体は実在するという意味で「実」であるのに対して、描かれるものはイリュージョン、「虚」になります。描かれるものはそれが「絵の具」という見え方から離れれば離れるほどイリュージョンになるわけです。また、私は布地に陰影を描いて湾曲して見えるような表現をします。これは、「実」が「虚」へと近づいていく関係だと思います。それに対して、描かれる何かしらのものに量感などの空間性を与えたりすることは「虚」が「実」に近づくことだと思います。私は、そのような「常に蠢くように行き来する関係性」に強い興味があります。立体作品やインスタレーションについても絵画メディアだけでは捉えられないそのような関係を絵画的な視点から展開しています。いうまでもないですが、立体の場合はより立体的・物質的なアプローチになり、インスタレーションはより空間的なアプローチになります。

また、私の絵画によく出てくるゴチャゴ

ができます。

チャした塊のようなものには非常に個人的なアリティがあります。以前にこのゴチャゴチャした塊に何故リアリティを感じているか考えたところ、その根底には私が吃音症でありその頭の中のイメージを具現化したものではないかと思えらく納得をしました。吃音症とはどもりともいわれますが話をしようとしても言葉が詰まつたり、声が出ないなどのことがある症状です。説明が難しいのですが、これを図でイメージしてみると、頭の中のイメージが声帯に繋がるまでの通り道が非常に狭いために詰まつたり、歪んだりするような感覚が個人的にはあります。この詰まつて圧縮されたり、歪んだイメージが画面のゴチャゴチャしたもののが元にはあると思います。また、私が境界を無くすことや行き来する蠢きに強い関心があるのはこのことが根元としてあるのだと感じています。

しかし、表現したいことはそこがストアトであつたとしてもそのような個人の内面の衝動などではなく、関係や相対性そのものの蠢きであることだと今は言い切ること

反乱するイメージ
シルクスクリーン、墨、
油絵具、水性アルキド絵具、綿布
130.2×144.6×6.2cm
2013年



反乱するイメージ（側面）



集積のリズム IV
シルクスクリーン、墨、
油絵具、水性アルキド絵具、綿布
115.1×130.4×6.4cm
2012年
上：側面



小川晴輝

1985年 神奈川県生まれ
2012年 東京造形大学美術科絵画専攻卒業
2014年 東京造形大学大学院造形研究科修士課程美術研究領域修了

個展

2013年 集積の拡散 Frantic Gallery／東京
2009年 イライラさせられる形象 Frantic Gallery／東京

グループ展他

2014年 VOCA展2014 現代美術の展望－新しい平面の画家たち 上野の森美術館／東京
第37回東京五美術大学連合卒業・修了制作展 国立新美術館／東京
2012年 Resonance - 共鳴 アートラボはしもと／神奈川
Art Award Next II 東美アートフォーラム／東京
群馬青年ビエンナーレ2012 群馬県立近代美術館／群馬
第35回東京五美術大学連合卒業・修了制作展 国立新美術館／東京
フランティックアンダーライン PART1 Frantic Gallery／東京
Frantic drawings Frantic Gallery／東京
2009年 My favorite things art project frantic, unseal／東京
frantic collections art project frantic／東京
2008年 五美大交流展 武藏野美術大学／東京
本日のランチ展 ギャラリーーーク／東京

潜在する感覚

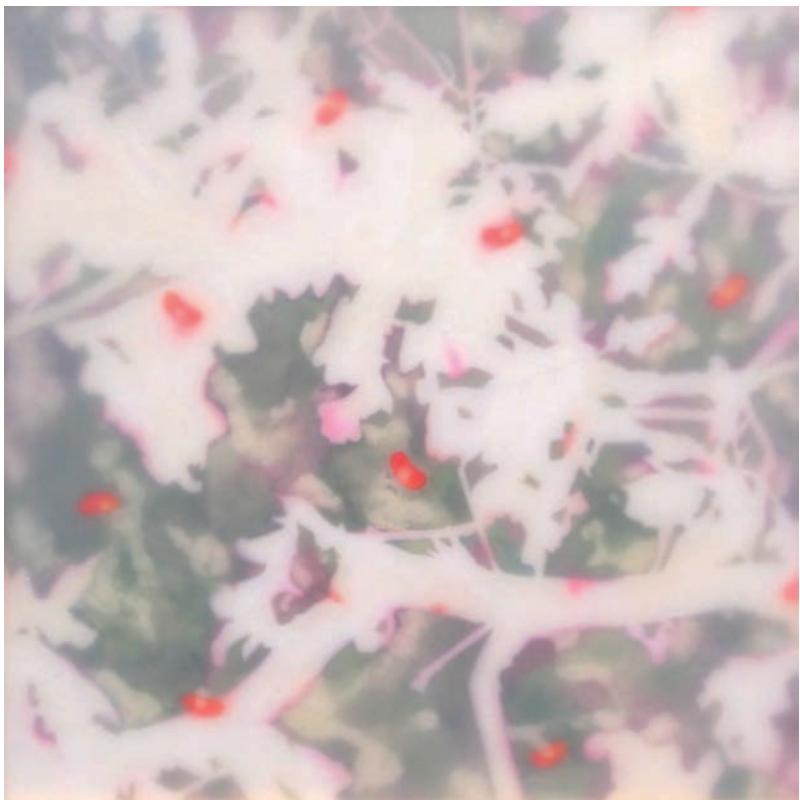
昨年、ある記事に目が留まった。ロシアの研究チームがシベリアのツンドラから発見された3万年前の植物の種子を発芽させる成功したというものだった。しかも花が咲いた1年後には新たな種子を実らせたという。日本で公共工事の際に、偶然出土した1400年前の蓮の種子が自然発芽した話は聞いたことがあったが、3万年前とは驚きだつた。地中深く眠っていた種が悠久の時を経て開花するという事実に妙な興奮を覚えた。そして3万年前について調べてみると、人類最古の絵画であるショーヴェの洞窟壁画が描かれた頃であることなどが分かった。人間は日々狩猟に明け暮れ、恐怖に満ちた自然と交感しながら野生に生きていただろう。もしかしたらその頃の感覚が自分の中に潜在していて、脳の一部分でも刺激したらシベリアの種子のように3万年ぶりに目覚めるのではないかという妄想に繋がつていった。

自分が都市に住む一人の人間である前に、自然界に存在する小さな一生命体であるといふ当たり前のことを見たことがある

た。その経験を機に人間の中に潜在的に存在する動物的感覚や原初的な感覚、またはそれを通して得られるものをイメージし作品化している。現代生活に慣らされてしまつたために表に出てくる術を失い、奥深くにうずくまっている人間が野生を生きていた頃の感覚、過去を受け継いでいる感覚といえるだろうか。それは、せわしく過ぎていく情報過多の現代生活の中では退化しているかもしれないが、今だからこそ人間が人間という生き物（動物）らしくあるためには必要なものに思えてくるのだ。

以前は細胞を想起させる様な有機的な抽象形態を描くことが多かつたが、最近は段々と風景や動物等の具象形態が要素として加わってきた。これはアニミズムや土着信仰、先住民の神話や自然崇拜への興味が増し、作品に強く影響してきた表れだといえる。

今後まず住む場所を思い切って変えようと思つてゐる。自分が一生命体であるということをより実感できる場で潜在する感覚を発芽させるべく制作したいと考えている。



Storyteller 2013- I

バラフィンワックス、透明水彩絵具、
モデリングペースト、ワトソン紙、木製パネル
41.8×41.8cm
2013年

深い水脈を探すように 2012-Coyote
バラフィンワックス、透明水彩絵具、
モテリングペースト、ワトソン紙、木製パネル
81.8×81.8cm
2012年
photo by 宇宙大使スター



小川泰生

1968年 佐賀県生まれ
1994年 多摩美術大学卒業
2007~2008年 文化庁新進芸術家海外留学制度研修員としてサンパウロに滞在

個展

- 2014年 Echo in the depths “深層のこだま” REIJINSHA GALLERY／東京
ギャラリー憩ひ／佐賀
2012年 深い水脈をさがすように ギャラリーYUKI-SIS labo／東京
2010年 ギャラリー憩ひ／佐賀
2007年 Teatres des SENS／東京
ギャラリー憩ひ／佐賀
2006年 杏風路舎／佐賀
2005年 水アンテナの記憶 ガレリア・デコ／サンパウロ[ブラジル]
2003年 Teatres des SENS／東京
2002年 Teatres des SENS／東京
2001年 Teatres des SENS／東京
2000年 INAXギャラリー／東京
1999年 ブラザギャラリー／東京
1997年 ギャラリー美遊／東京

グループ展他

- 2013年 Coletiva de acervo -Em foco obras do artista japonês Ogawa Yasuo, e outros- ガレリア・デコ／サンパウロ[ブラジル]
2012年 Magnetic Field Resonance -磁場共鳴- ギャラリーYUKI-SIS／東京
MARCAS DO TEMPO ガレリア・デコ／サンパウロ[ブラジル]
-透過する揺らぎ- 小川泰生・鳥山秀直展 ギャラリー憩ひ／佐賀
2010年 KONSEI 2 ガレリア・デコ／サンパウロ[ブラジル]
SP ARTE 2010 サンパウロ州立現代美術館／サンパウロ[ブラジル] ('08, '09)
2009年 コレカラ展 Teatres des SENS／東京
2008年 ARTE BRAZIL-JAPAN MACサンパウロ州立現代美術館／サンパウロ[ブラジル]
Acervo展 アマレイロネグロ コンテンテンポラリーアート／リオデジャネイロ[ブラジル]
Entre Oceanos 100 anos de aproximação entre Japão e Brasil ラテンアメリカ現代美術館／サンパウロ[ブラジル]
2007年 Coluna Infinita ラテンアメリカ現代美術館／サンパウロ[ブラジル]
MIX ガレリア・デコ／サンパウロ[ブラジル]
2006年 越後妻有アートトリエンナーレ 「儀明劇場“倉”」プロジェクト／新潟 ('03)
2003年 ワックス ワーク サイト ギャラリー砂翁&トモス／東京
2002年 第5回藤野国際アートシンポジウム2002 藤野町／神奈川
2001年 アーティスト・イニシアティヴ・リンクス"パドルズ" クンストラハウス・ドルトムント／ドルトムント [ドイツ]
TAMA VIVANT 2001 多摩美術大学八王子校舎、都営大江戸線都庁前駅／東京

静かな場所

日常のなかで感動したことが絵につながる。そして絵を描く上で気づいたことが日々常にかえってくる。絵を描いている時間、ものを見る時間、絵を描いていない時間、すべての時間を経て絵ができるあがる。

目立たないどこにでもある草木や、気にも留められないであろう場所の持つ佇まいやおもむき、全体の醸し出す雰囲気が好きである。そういうのを目にしたときに、絵にしたら素敵かもしれないと思い、その瞬間に、目に映つていたものは二度と見られず、すべて流れていくものだということを実感する。それでも絵を描いていると、本当に大切なことはちゃんとまた湧き上がつてくる。そこに大切な何かがあり、絵にすることでより際立つようと思う。目に見えないものは確かにあると思える。

今思うことは、今後、表現の仕方が変わつても私にとってこのことが軸であるということと、この軸が変化することがあるとしたら、きっと私が生きていく中で考え方方が変わつたときであろうということだ。絵という場所は、物事のひとつひとつに、注意深く、落ち着いて、静かに向き合える、私にとつてかけがえのない場所だ。画面上で絵の構造や色彩、明暗とのやりとりをしていると、絵の中で生きている感じがする。

具体的には、草木の位置や、壁面にあたる光の形、枝の影や色や形などが絵の要素となり、それらの関係性を描くことで絵と現実が結びつく。

例えば、錆びた鉄の支柱1本にしても、

絵に描くとなつたら、画面の構成上それを入れるべきかどうか、描く場合は、傾き、色、明暗はどうするのかということを考えなければならない。錆びた鉄の支柱は、それ自身は取るに足らない、何でもないものだ。私自身、視界の端でとらえたとして、絵にしようと思わなかつたら、そのあとは見向きもしないかも知れない。絵に描きたいと思うから注視でき、絵のなかでは大事な要素のひとつになる。描きたいとさえ思えば、何でもないものを大切に扱うことができる。取るに足らしいものと、かけがえのないものとは実はそう遠くないのではないかと思う。

これから先、いろいろなことがあると思うけれど、できる限り広くたくさんの世界を見ながら、大切なものが何であるかを考え、絵を描いていきたいと思う。



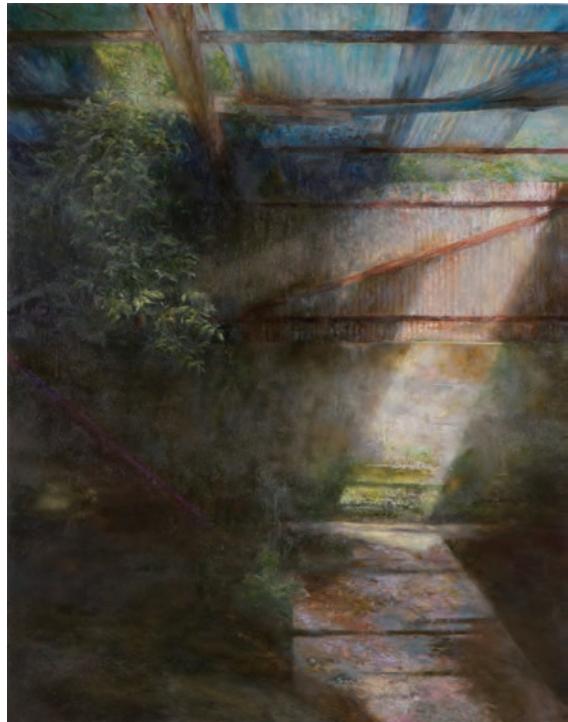
見上げた窓

油彩、エマルション、綿布、パネル

38.0×45.5 cm

2014年

光の行方 I
油彩、エマルション、綿布、パネル
238.5×185.5cm
2012年



小野有美子

1987年 福島県生まれ
2010年 武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻卒業
2012年 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展

2014年 櫻木画廊／東京

グループ展他

2014年 第32回上野の森美術館大賞展 上野の森美術館／東京
2014春 ～布石～ REIJINSHA GALLERY／東京
2013年 第1回損保ジャパン美術賞展 FACE 2013 損保ジャパン東郷青児美術館／東京
第22回 ARTBOX大賞展 受賞記念展 世界堂新宿本店6階展示場／東京
余白の時間 SAKURA GALLERY／東京
2012年 たいせつにかんじるもの SAKURA GALLERY／東京
2011年 第24回 日本の自然を描く展 上野の森美術館／東京
理化学研究所展示プロジェクト EXHIBITION 2011 独立行政法人理化学研究所 横浜研究所／神奈川
2010年 第9回 風の芸術展 トリエンナーレまくらざき 枕崎市文化資料センター南溟館／鹿児島
さかいで Artグランプリ2010 坂出市民美術館／香川
2008年 五人展 Galerie juillet／東京
二人展 ビッグアイ市民プラザ／福島
2007年 チェーンリアクション展 BankART1929／神奈川
2006年 あかとき展 ビッグアイ市民プラザ／福島

上脇田直子

KAMIWAKIDA Naoko

軌跡／残像

小学生の時、授業で習つた“かげおくり”や星の軌跡の写真。あるものが媒介になって、見えるはずのないものが残像や軌跡として形を残す。星の軌跡の写真は写真を通して、ある一定の時間（星の足跡）を感じ取ることが出来る。幼い頃からこの見えるはずのないものが見えることに対する不思議に感じていた。それと同じように、記憶の中に残っている風景や残像、こちら側でもなくあちら側でもないどこか掴みどころのない混沌としたもの、一定の時間に見られるものの軌跡といった不在の対象を一度自分というフィルターを通して見つめ直し、再構築したものをキャンバスに残したいと思いつながら描いている。そのいわば自分の記憶の中にある不在の対象を描くことで少しでも鑑賞者の記憶の片隅に眠っているそれを共有できればいい。

制作自体は大まかに作つた下書きとイメージをもとに描き進め、描いていく中で線や色を足していく。色は薄塗りで、不透明な白と透明色をよく使う。透明色と不透明色を交互に重ね合わせて使うことで、層が生まれ、画面の中に空間が出来る。また、色

も線も一定のものではなく、リズムを意識して描くよう心がけている。今回、ホルベイン・スカラシップの奨学生になつてからは今まであまり使うことのなかつたアクリル絵具をよく使うようになつた。一定の表現方法に固まらず、描き方も画材も柔軟に対応していきたい。

絵を描き始めて8年程経つが、今まで描いた絵を見返すと、使用する画材やモチーフ、描き方はだいぶ変わつてはいるものの、根本的に描きたいものは変わっていないようになる。まだ“何を描くか”ということに感じる。まだ“何を描くか”ということに対して自分で完全に確立できていないところもあるが、キャンバスに向かつてひたすらに手を動かしていれば何かしら見えてくるのではないかと考えている。



雨上がり

アクリル、ジェッソ、綿布、パネル

45.5×53.0cm

2013年



platform

油彩、テンペラ絵具、石膏地、綿布、パネル

194.0×324.0cm

2011年

上脇田直子

1986年 鹿児島県生まれ
2009年 鹿児島大学教育学部美術科卒業
2011年 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻修了

個展

2011年 透過した風景 GALLERY b.TOKYO／東京
2010年 上脇田直子展 Galerie Moineau／東京

グループ展他

2014年 space2*3 OPEN記念取り扱い作家小品展 space2*3／東京
2013年 庄野文平／上脇田直子 focus and diffusion vol.1 Shonandai MY Gallery／東京
UNBLEASHED 2013 | 2 GALLERY TRINITY／東京
2012年 アトリエ・モヴィーダ 西武池袋本店／東京
EXHIBITION C-DEPOT 2012 TOKYO-YOKOHAMA スパイラルガーデン／東京
C-DEPOT selection シブヤ西武美術画廊／東京
リキテックス アートプライズ 2012 ラフォーレミュージアム六本木／東京
風景の気配 新宿眼科画廊／東京('10、'11)
ART&PHOTO BOOK EXHIBITION 新宿眼科画廊／東京('10、'11)
Unknown possibility 新宿眼科画廊／東京('10、'11)
2011年 nine colors シブヤ西武美術画廊／東京
ワンドーシード2011 トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
筑波大学大学院博士前期課程芸術専攻修了制作展 茨城県つくば美術館／茨城
2010年 シブヤスタイル vol.4 シブヤ西武 美術画廊／東京
第14回新生展 新生堂／東京
トーキョーワンダーオール公募2010入選作品展 東京都現代美術館／東京
2009年 鹿児島大学教育学部美術科教育学研究科卒業・修了制作展 鹿児島県歴史資料センター黎明館／鹿児島
2007年 南日本美術展 鹿児島市立美術館他／鹿児島
TOU、展 ギャラリ一彩／鹿児島('06)
2006年 第6回福知山市佐藤太清賞公募美術展 福知山市厚生会館／京都他巡回

いつかの日差しを真似て

何もないのではなく、何かがあるということ。自分という観察者が、目に映る形の奥に、なんらかの存在を感じた瞬間、なんでもないものに呼び名や役目が生まれ、世界は少しづつ立ち上がつて現れる。

2013年は、びっくりするほどの夏日が続いた。部屋の窓辺の紙が、ネガポジを反転し、ものの輪郭を淡く焼きつけていた。私は、はさみの形にそつて日焼けした紙を見て、洋裁の仕事をしていた母のことを思い出した。ここにはいない、母の手だ。早く帰つてこないかなと一人で眺めた時間の感触を思い出した。静かに通りすぎた風景は、どんななかたちで人の中に記憶されているのだろうか。

記憶とは、喜びやさみしさといった感情を超えて「在る」という事実に触れるところで呼び起される場合がある。ポケットに入つたままのハンカチや紙くず、表紙のない古本や挟んだ押し花、届いた手紙や褪せた写真。庭に咲いたと貰った花や実のついた枝。絵や食器の梱包材。果物やお菓子の

包み紙。日常を経由したささやかなかたち。それらのかたちの奥には、人の気配や動作や呼吸、周りの景色さえも感じられることがある。考古学者が土の中から歴史を掘り起こす様に、私は画材を使つて顔を出した出来事を掘り起こしていく。エアブラシを使つてオウツツを探り当てる。空気圧によつて散りばめられる絵の具の粒子は、暗いトンネルを潜りぬけて目の前に差し込んでくる灯りの様だ。一部が稜線に付着して形を帯びる。見えていなかつたモノを照らし出す光になる。ねらつた場所をはみ出して無意識の場所へと着地してしまうが、それらは新たなシグナルなのだと最近気づいた。

すでに見えていたものは現実と同じで埃をかぶる様に覆われていき、見えていなかつたものには影が現れ、浮き彫りになつて立ち上がるのだ。

色によつて探し当てたものは、静かな時間である。玉虫色の様に複雑な記憶を呼び起こしながら、目の前の静かな時間をここで保管したい。



右：echo

アクリル、日焼けした詩集の一ページ

左：echo

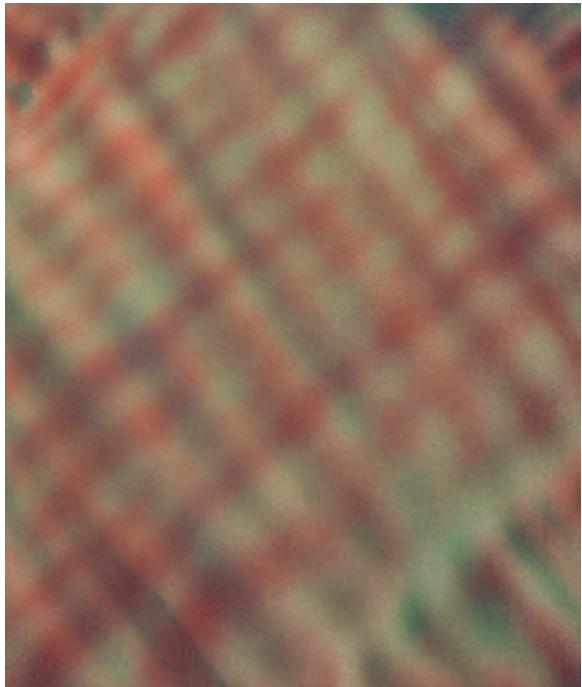
アクリル、日焼けした詩集の一ページ

各14.3×10.4cm

2012年

photo by 田中雄一郎

wavy
アクリル、布、パネル
45.5×38.0cm
2012年



木下令子

1982年 熊本県生まれ
2007年 武蔵野美術大学油絵学科卒業
2009年 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展

2015年 清須市はるひ美術館／愛知にて1月6日～23日迄開催予定
2014年 浮きの下の魚 Gallery Barco／東京
2012年 なぜなにもないのではなくにかがあるのか 新宿眼科画廊／東京
ノイズのなかでささやいた LOOP HOLE／東京
2010年 -曖昧な輪郭- 新宿眼科画廊／東京
2006年 東京の風景 kife／東京
-小舟が浮かぶために- Loft Gallery／東京
2005年 -あやをとる- 蔵ギャラリー／東京

グループ展他

2014年 ECLIPSE 日伯交流展 サン・カエターノ市立美術館／サンパウロ【ブラジル】
2013年 ダイ チュウ ショウ -最近の抽象- 府中市美術館市民ギャラリー／東京
Imago Mundi クエリーニ・スタンバーリア財団／ヴェネチア【イタリア】
CHOCOLATS DES FUCHU -進撃の府人- LOOP HOLE／東京
2012年 清須市第7回はるひ絵画トリエンナーレ 清須市はるひ美術館／愛知
CHOCOLATS DES FUCHU ~府中の味~ LOOP HOLE／東京
2011年 トーキョーワンダーウォール公募入選作品展 東京都現代美術館／東京

黒宮菜菜

KUROMIYA Nana

滲みと暈し

絵の具が流動的に広がつて滲んだり、絵の具同士の色を暈し合わせてグラデーションを作つたりと、絵の具遊びをしているうちに生まれたマチエール。その表情に魅せられ、今のような表現に辿り着いた。

“滲み”や“暈し”といった表現は、いずれも「不鮮明」な表現といい換えることができる。滲み、はみだし、形が不鮮明になる、色や形の際が暈され不鮮明になる、といったようだ。

絵画の長い歴史には、不鮮明表現が数多く登場する。西洋油彩表現ではスマートにみられる暈しの表現に始まり、東洋では水墨画などの滲みの表現に始まる。近代以降になると、洋の東西を問わず、様々な絵画の上で滲みや暈しが描かれてきた。

なぜ、不鮮明表現が、絵画において今日まで絶えず繰り返し用いられてきたのだろう。それは、絵画にとって、不鮮明な表現が何かしらの普遍的美をもたらすからではなかろうか。

滲みや暈しは美しい。人工的に作つていいのにもかかわらず、そこには、人の手だけでは到底辿り着けない神秘的妙味がある。

人をモチーフに定めた理由は、人間がありのままの姿ではない性を持つたものであるからだ。裸の、自然のままの姿

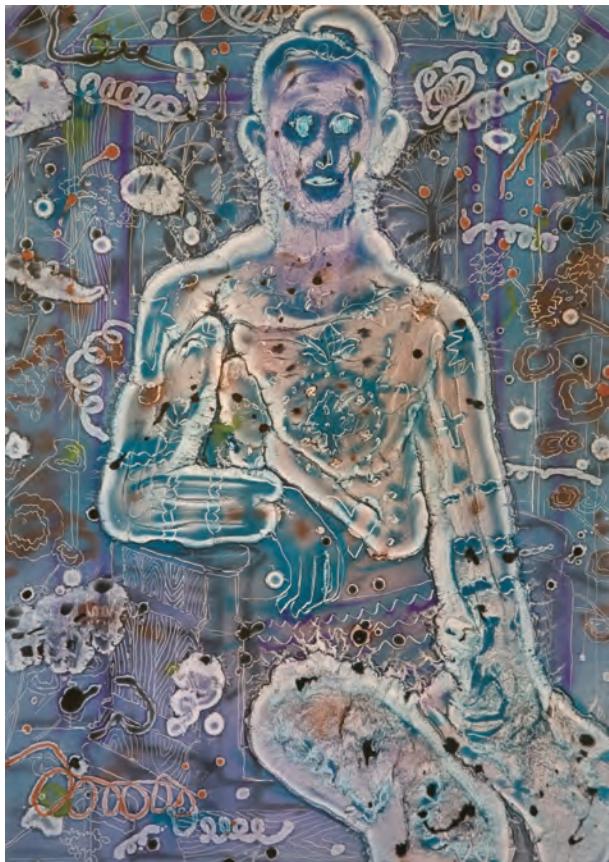
人をわくわくさせ、心を揺さぶるような根源的な力を宿しているようにも感じる。

このような滲みや暈しといった表現技法は、絵画において、「何か」を描くための手段と捉えられがちである。しかし、わたしは、絵画を滲ませたり、暈したりする技法、それ自体を絵画作りの動機としている。つまり、「何か」を描きたから滲みや暈しの技法を使うのではなく、滲みや暈しといった魅惑的な表情を用いて「何か」を描きたいのだ。

最近では、主に人物をモチーフに、滲みや暈しの技法を多用しながら絵を描いている。空バケで色を暈しながら描いた絵の具の上に、その絵の具が乾ききらいうちにメディウムやオイルをたらし込み、滲んだ形を使つて人体を描いてゆく。滲みは、液体の広がりであるから完全にコントロールしきれるものではなく、決められた枠から膨張し、はみだして、不定形な人物像になる。

でいることに耐えられず、人は常に身体に手を加える。服を着る、化粧をする、髪を整える、髭を剃る。時には、身体にメスを入れてまで自分をカスタマイズする。整形、刺青、下着による身体加工。人は、身体を膨張させたり、収縮させたりしながら、常に身体をコントロールしようと努めざるを得ない。

その行為は、滲みをコントロールしようと努めながら絵を描く、わたしの制作スタイルと重なる。滲みは、放つておけば、自然に広がり固着して、抽象的な形をつくり出すに過ぎない。しかし、わたしは、そのままのままの滲みの広がりではあき足らず、滲みを抑制してまで、何かの形を描こうと努めてしまう。ありのままの姿に抗おうとする人間の性のようなものが、制作過程のなかにも入り込んでいるのだと思う。



肌にまとう柄 #3
油彩、メディウム、
イラストレーションボード
103.0×72.5cm
2013年

無題

油彩、アクリル、メディウム、
キャンバス、木製パネル
41.0×32.0cm
2012年



黒宮菜菜

1980年 東京都生まれ
2007年 京都造形芸術大学芸術学部美術工芸学科洋画コース総合造形専攻卒業
2012年 京都市立芸術大学大学院美術研究科博士(後期)課程満期退学

個展

2010年 INAXギャラリー2／東京
2009年 谷門美術／東京
2008年 谷門美術／東京

グループ展他

2013年 Drawing Exhibition #4 -ひとすじの行方- CAP STUDIO Y3／兵庫
ART OSAKA 2013 絵をえがくこと -タブローとドローイング- 黒宮菜菜・新平誠洙・水田寛・吉岡千尋 ホテルグランヴィ
ア大阪26階／大阪

2012年 京都市立芸術大学博士課程展 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA／京都
INTERIM SHOW 京都市立芸術大学博士棟／京都 ('10、'11)
ACG eyes 5:Four Paintings -黒宮菜菜・水田寛・塙入ゆり・新平誠洙- ART COURT Gallery／大阪
極並佑・黒宮菜菜・三好彩展 渋谷ヒカリエ 8/CUBE 1,2,3／東京

2010年 Art Court Frontier 2010 #8 ART COURT Gallery／大阪
2009年 ART AWARD TOKYO 2009 行幸地下ギャラリー／東京 ('07)
LOCA 2009 京都市立芸術大学3号棟4階廊下／京都 ('08)
作品中! '09 galerie 16／京都

2008年 混沌から躍り出る星たち2008 ギャルリ・オーブ／京都、スパイラルガーデン／東京
TOKYO EYE 06 大丸東京店／東京
四条ストリートギャラリー 高島屋、田ごと／京都

2006年 呼吸する out line gallery RAKU／京都
呼吸する out line vol.2 ART ZONE／京都

絵画なとき

瞬間的にくる、ぶわっ！と楽しくなるような盛り上がる瞬間。耳が聞こえなくなつて、でも違う音が聞こえてくるかもしけないあの瞬間。更なる時は、目にもくる。あの瞬間を私は知つている。

ものを見て絵の具を感じて、そのふたつの重なりを感じて絵にする。一步一歩。一筆一筆。偶然の重なりが道を増やし頂点を目指す。絵の具の状態、持った量、自分の感覚、一切が合わさった奇跡な時、わたしの絵のあるべき場所に絵の具ははまつていく。そこで良い、ここである、という確信を持つて絵の具を置くことが出来る本当に奇跡的な瞬間である。そんな時は深いところで自分がふたりおり、この瞬間を終わらせたくない、いつまでもと願う自分と、このおかしな確信に疑いを持つ自分が、手に流れる感覚に対抗する。そんなことではぶれないこの感覚のたくましさに気分は高まる。この文章を描いていても思い出してしまうあの高揚感。まだ幾度とも味わつたことはないが、はつきりとあの短く長い不思議な時間を思い出せるのだ。

絵は登れぬあこがれ山のようだ。油絵の具そのものの色、出して触れたその物質感、見ていて飽きず、とにかく色がきれいだと思う。そこまず感動する。この絵の具力を持つてして、纏いたいとさえ思う道で出会った花柄、すぎなものとすぎなものが重なり絵として現す衝動に駆られる。できだ！これが私のかたちだ！なんて思える完筆はほぼ皆無。しかし、「思い」が封じ込められたタイムカプセルであることは間違いない、それを糧にいつの日かまたあの瞬間の連なる頂点を目指し、何度も挑戦したいと思える絵画の世界は尽きることなく魅力的だ。

ものを見て感じて、その先の宇宙を感じて自分の手を動かしそこから現れる形を目にすることができ、楽しむことのできる絵。絵を描くという行為が誰にでもできる身近なものであるなら、それを人にまたもう一度感じてもらう絵を私は描いていたい。

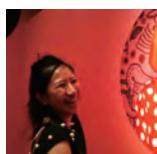
これが私の絵画すること、大感動である。



Flower Show
油彩、キャンバス
130.3×194.0cm
2013年



チューリップ
油彩、キャンバス
130.3×130.3cm
2010年



児玉麻緒

1982年 東京都生まれ。
2008年 多摩美術大学絵画科油画専攻卒業
2010年 多摩美術大学大学院美術研究科博士前期課程絵画専攻油画研究領域修了

個展

2013年 gallery アソビバ（座・高円寺）／東京
2008年 鶴水青年美術館（多摩美術大学）／東京

グループ展他

2013年 Mercedes-benz fashion week Marimekko A/W 13／ストックホルム【スウェーデン】
2012年 Flag Art 歴代受賞者作品展 JR岐阜駅／岐阜
2011年 被災児支援チャリティ展 アキバタマビ21 (3331 Arts Chiyoda)／東京
2010年 FLOWERS-To the way of the wildflowers- Gallery惺／東京
第14回Flag Art展 2010 岐阜市内／岐阜
2009年 定点 2009 Gallery惺／東京
天草在郷アンデパンダン展 天草在郷美術館／熊本
2008年 f/plot Textile Exhibition 2008 gallery STRT LINE／東京
2007年 Festival d'Avignon／アヴィニヨン【フランス】

坂口竜太

SAKAGUCHI Ryuta

もう一度みたい風景

はじめは自分がなにを描きたいのか、なにを表現したいのかわからなかつた（いまもそうかもしないが）。それでもなぜか長い間絵を描いてきた。あまり意味はないと思う。

繰り返し同じモチーフを描くことに憧れている。

山に入つて迷う、ふと開けた場所にでるとそこには小さな池と祠がある。もう一度訪れるることは難しい、迷つて偶然たどり着いた場所だからだ。

また訪れたくて探しまわる。しかし遭遇するのは巨大な岩、樹木、空き地、池と祠に辿り着くことはできない。

果たして池と祠は存在したのか、それは幼い頃経験したと思い込んだ虚偽記憶なのか。記憶は本当に信用できない。一日に感じたり、一年に感じたりする。記録のない過去の記憶はすべて疑わしい。（記録があつても疑わしい。）でもそれでいいかも知れない、経験が役に立つたことはあまりない。

人生は一度きりの旅のようなものだと思う。居場所を見つけることができず自分が求める場所を探して移動しつづける。旅はなに

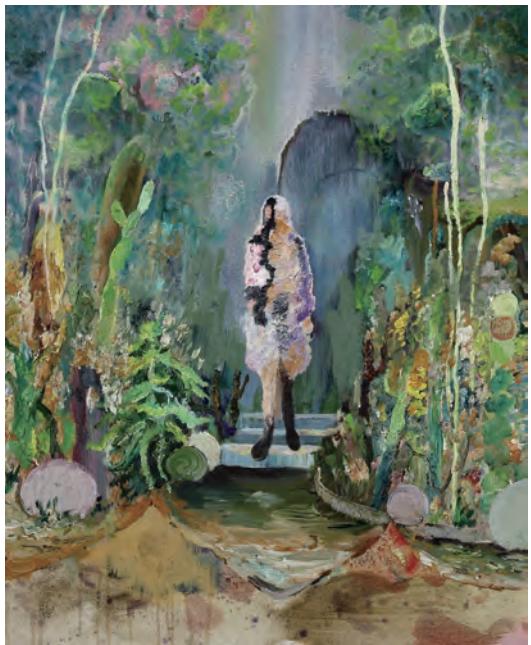
がおこるかわからない。少し先の未来のことすらわからず予定とは違う大幅な転換を余儀なくさせられる。

絵も同じだ、描きはじめるとき全体の構想はあるかもしない。でも描き終えるときは絵にも一種の物語がある。でもそれは文学的なもの。文字通りの絵画ではない。線を引いたり、色をおいたりをしつこく繰り返したときに生まれる圧力の微妙なニュアンスによって、それは曖昧にも詩的にもなりうるし柔らかくも包括的にもなりうる。さらには強烈にもなりうる。そんな一度きりしか出会えない絵画をみるために絵を描きたいと思う。



眼のある丘
油彩、キャンバス
162.0×130.0cm
2013年

サボテンの女
油彩、キャンバス
65.0×53.0cm
2011年



坂口竜太

1978年 岡山県生まれ
2003年 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業

個展

2013年 NICHE GALLERY／東京
2012年 NICHE GALLERY／東京
2010年 NICHE GALLERY／東京
2009年 NICHE GALLERY／東京
2008年 NICHE GALLERY／東京

グループ展他

2013年 若手5人展 YOYOGI ART GALLERY／東京
SCENE 上野の森美術館ギャラリー／東京
2012年 上野の森美術館入賞者展 上野の森美術館ギャラリー／東京
2011年 横浜みなとみらい展 横浜市民ギャラリー／神奈川('07)
2010年 マイフェイバリットシングス フランティックギャラリー／東京
2009年 第12回岡本太郎現代芸術賞展 川崎市岡本太郎美術館／神奈川
2008年 トーキョーワンダーシード トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
2007年 夢広場はるひビエンナーレ 清須市はるひ美術館／愛知
上海アートフェア／上海[中国]
シェル美術賞展 代官山ヒルサイドフォーラム／東京('06)
2006年 ART BOX選抜展 ART BOXギャラリー／東京

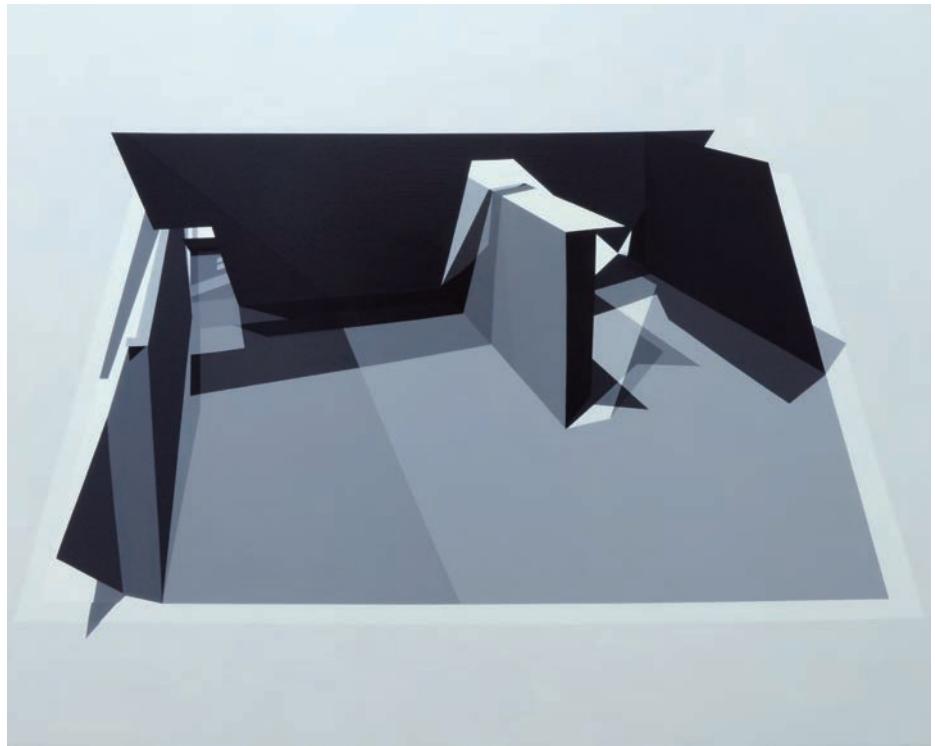
制作について

ギャラリーやスタジオなどの空間を再現した模型をモチーフに絵画を制作しています。モデルとなる空間は、実際に作品を展示するギャラリーや、自身が制作をしているスタジオなど、身近な場所もあれば、インターネットを通じて見る、どこかのギャラリーの展示空間など、訪れたことのない場所もあります。

制作は実際の空間や、インターネットから集めた画像などを元に、模型に再現するところから始めています。床の面積や天井の高さ、壁の幅や厚み、開口部の位置や大きさなど、書き出した情報から図面を起こし、模型を製作。模型となつた空間を被写体として撮影し、その画像を用いてキャンバスに描き起こしていきます。

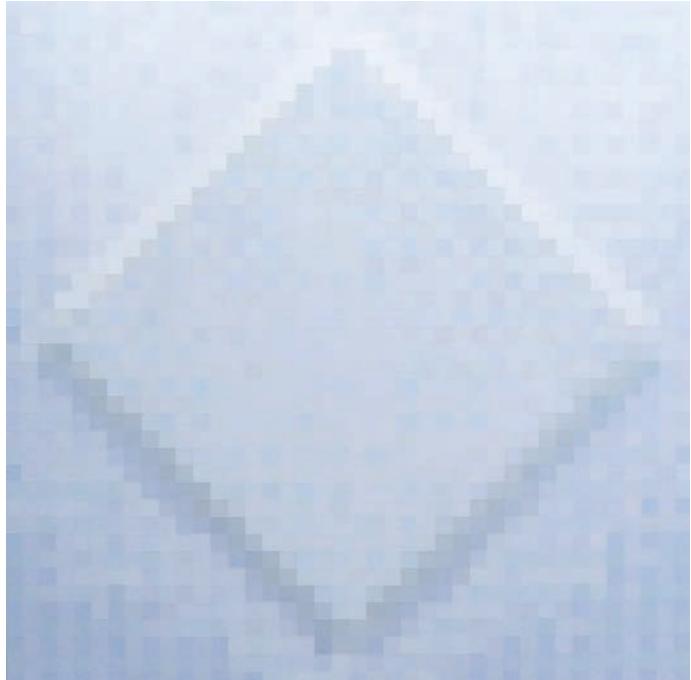
また、こうして制作した絵画の作品画像を素材に再制作も行っています。平面上の空間から、立面（壁面）を切り起こしていくことで再び三次元の模型につく

り変え、そのイメージを元に新たに絵画を制作。二次元と三次元の間を行き来することで、空間は少しづつ形を変化させていきます。こうしたプロセスを重ねていくことで、新たな視点や考えにつながっていくことを期待つつ、制作を続けています。



Studio

油彩、キャンバス
131.0×162.0cm
2013年



White Stroke
アクリル、パネル
100.0×100.0cm
2012年



佐々木耕太

1982年 千葉県生まれ
2012年 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業

グループ展他

2013年 042 art area project 2013 スーパーオープンスタジオ REV／神奈川
2012年 WALL FLOOR WINDOW 東京造形大学 CS Gallery／東京
REV OPEN STUDIO REV／神奈川
佐々木耕太・松本加奈 Gallery Q／東京
2011年 「アイムアダイバー」 KOSHIKI ART EXHIBITION 2011 鰐島／鹿児島
2010年 camaboco 東京造形大学旧絵画棟／東京
「齬島で、つくる。」 KOSHIKI ART EXHIBITION 2010 鰐島／鹿児島

<http://kota-sasaki.com>

原 夕希子

HARA Yukiko

私は、自分の左手中指の皺を描いています。皺のことを『ゆびふし』と呼び、描き続けて5年が経ちます。

大きな手がずっとコンプレックスで、だからこそずっと気になっていました。何かに触れることで受けた外からの感覚と、力を入れたり緩めたりする内からの感覚を感じに受け取る、ゴツゴツでシワシワのぬくもりが違う手。スケッチチブックに様々な角度や形の左手を描きながら、掌でなく甲を多く描いていることに気づきます。なぜだろうかと左手をよく見ると、指の皺の形は柔らかで色はとても複雑で、さらに中指の皺の形はどの指よりも整っています。私は手の中でも特に中指の皺『ゆびふし』に興味があることを知りました。それなら、

私が美しいと感じ惹かれている『ゆびふし』だけを描いたら、とても楽しいのではないか。ここから『ゆびふし』の制作が始まりました。

『ゆびふし』を描く時は最初に、使う絵の具の色を決め、それ以外の色は最後まで使いません。完成図は無いまま、キャンバスに自由に色をのせてから一つずつ『ゆび

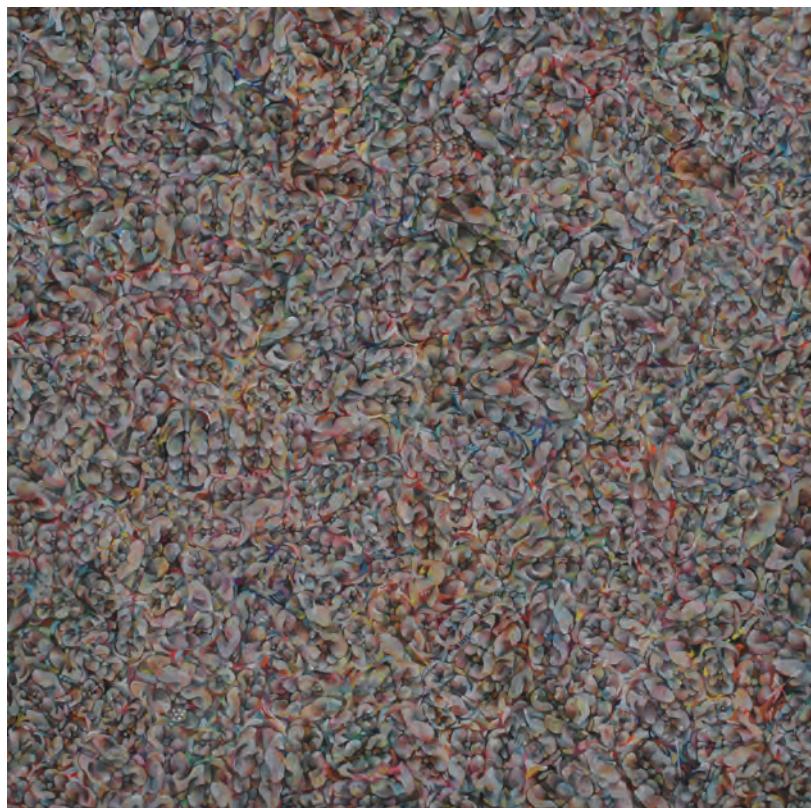
ふし』を描いていきます。『ゆびふし』の下からうつすらと透ける下地の色がぬくもりの通り、多くの層から成り立つ『ゆびふし』の色の複雑さを表します。油絵具の乾きの緩やかさも、時間がゆっくりと流れながら『ゆびふし』が画面に定着していく様子に合っています。

『ゆびふし』を描き続ける制作は日々と時間を消費していきますが、描き終えた画面は確実に想いの痕跡を残してくれます。左手の『ゆびふし』を見て右手で描く。自分を通しての左から右への循環。制作中は「一枚の絵を仕上げる」というより、一つの『ゆびふし』と向き合う時間の積み重ねが結果として“一枚の絵になつた”的感覚であります。

そして長い時間を共に過ごした絵は、最後の一つを描き上げると自分が描いたものでないような距離を感じます。描かれているのは私の体の一部なのに。そう感じるのは私の一部だからこそ、向き合った時間の積み重ねがあるからこそ、離れても大丈夫だという安心感と作品へ対する信頼なのがもれません。

ゆびふし

キャンバスの上でより心地良く、より魅力的に書いてほしい。まだまだ、「ゆびふし」は向き合っていきたい魅力的なモチーフです。



幾重
油彩、キャンバス
53.0×53.0cm
2014年



鼓動

油彩、キャンバス

162.1×227.3cm

2011年



原 夕希子

1987年 広島県生まれ
2009年 尾道市立大学芸術文化学部美術学科油画コース卒業
2011年 尾道市立大学大学院美術研究科絵画研究分野油画コース修了

個展

2013年 スペース甦謳る／広島
2010年 ギャラリーひらた／岡山
2009年 ギャラリーひらた／岡山

グループ展他

2014年 ミツメ 尾道市立大学美術館／広島
2013年 備後魂展NEXT スペース甦謳る／広島
2012年 第86回国展絵画部企画展示 新しい眼－若手作家の挑戦状－ 国立新美術館／東京
2011年 サカトミチ gallery月夜と少年／大阪
様々な邂逅展－新たな時代感覚へ－ あーとらんどギャラリー／香川

ヒラカワカツヤ

HIRAKAWA Katsuya

栢を挟むそのくらい

さらさらと何もない一日を繰り返していく。ただ、もうみんな違う場所へ行つてしまっている。そんな気がする。

ただただ進む日常の出来事の中にも感情の波はある。けれども私自身のことなのに、なんだか以前よりもそれを他人事に感じてしまう。

とりとめのない考え方をする

かつて、ある人が私に云つたように、私は何もかもを知らなさすぎるのだと思う。それは、どちらの見てきたものが正しかつたのかどうかといった、そういうことではなくて、物事の根元の部分を共有できないことにその人はきっと失望していたのだと思う。そして今もきっと、私は見当違いのことばかり知ろうとしているのだろう。

人が町を作つてゐるのなら――

ある町のある場所は、それが当然というように偽物を飾ることでお金を取つていた。アートフェスはなんだかお金の匂いがした。

環境問題を叫ぶ音楽フェスに向かう長蛇の列の人々の振る舞いと、それに無関心な列の人々を見た。

ある場所では生き物たちが神経症になるという話を聞いた。実際に狂気的な行動をしている姿を見たことがあった。

私の住む町の近くには、原子力発電所が建つてゐる。ある人々にとつて厭なものは、視界に入らない、どうなつてもいい、どうでもいい場所に置かれるのだと思った。そういう場所がここだと云われて、そういう場所がここだけでなくいたるところに存在して、始まりはいつからだつたのだろうかと思つた。

物事には、語られずに進むものがあつたり、終着点はあらかじめ決まつていて、時間はただ空費されるためにある。そんなような気がした。重要ではないことを必要なことにしてしまつたり、大げさな理由の後付けをする人や、かつて自らが激賞した者たちのそのあとを、その存在が全てなかつたかのように一言も言及しなくなる人がいるのは、それを許し支えている人が大勢いるからなのだと私は思う。

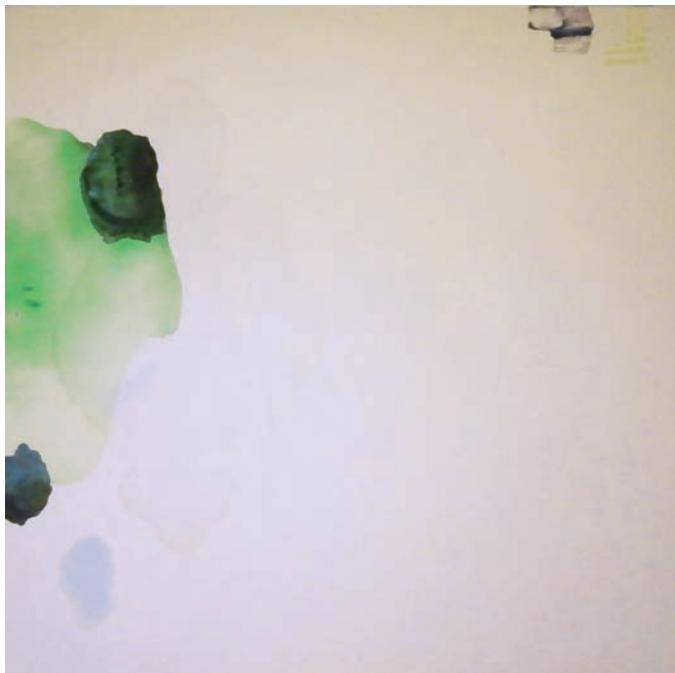
日々の暮らしの中に、全てがあつて意味は
わからない

市井の人の言葉を大事にしなさいと、あ
る人は私に云つた。そこには、言葉で並べ
きれないほどの暮らしがあり、それぞれの
家族のかたちがあつて、生計のかたちがあ
る。綺麗な物語じやない。例えば労働が
あつて、家事があつて、睡眠があつて、休
日は病院へ行つたり職探しをしたりする。

一日のどの隙間に絵を眺めると云うのだと。
大事なことは、明日着ていく服があるかや、
昼食代があるかや、しつかり振込ができる
いるかであつたりする。そうした中で聞こ
えてくる声は眞実だと思う。そうしてその
中に私も確かにいる。

理想があつて、徒労があつて、宗教が
あつて、地域の因襲があつて、誰もが複数
の役割を演じている。いつも複数の進行中
の事柄がある。

そうして日々の感情は、積み重なつて
いつたり、削られて忘れていつたりする。
泡みたく。葉を挟むそのくらいの、過ぎて
は消えてしまつ瞬のものみたく。



無題

アクリル、錦布、パネル
146.0×146.0cm
2014年



アンバー
顔料、アクリル、綿布、パネル
146.0×117.0cm
2012年



ヒラカワカツヤ

1983年 静岡県生まれ

脱臼絵画論

ふと、絵が自分で作つたしがらみの中にいるのをやめようと思つた。

歳を重ねるごとに骨を外して、柔軟に表現していきたい。身体をほぐし、繋ぎ目を動かし、組みかえ、時には骨まるごとなくのものい。肉体改造だ。こうして描いたものを「脱臼する絵画」なんて呼んでみると、いかにも狙つた感じもするが、言い得ている部分もある。関節が外れているのは描く私と絵の両方だ。

〈フェンスの奥に木立や家が見える。遠くに焦点を合わせるとフェンスはぼやけて、その大きさもある場所も判らなくなる。〉
〈ぬるい湯に浸かった時、自分がどこまでか判らなくなる感じが心地よい。〉

〈飼い猫がなくなつた。家の余白をこう

渡つたなという残像、ふわっとした気紛れな存在感そのものが猫だ。通りすぎる存在。〉

〈反射する濁り水。〉

〈美しいのかおそろしいのか、境界の判らないものたち。〉

私はこんな、自分の中にある不燃物みたいな感触や魅力、問題をたねに制作する。

これらの曖昧さを借りて絵の具をのせ、問い合わせたい。無意識的なものや判りきれないものに絵の中で出会い、それをあらわにしておきたくて描く。脱臼して打つた手は、ナンセンスと共に時折そういう何かを絵に呼び込んでくれる。骨が抜けて風通しの良い、でも不思議と存在が立つて循環するような関係が画面に生まれればいい。絵はよき問い合わせたいものだ。

私的な体感Ⅱへへから出発して、違う感触のふたを開けることが表現を通してできたらと願う。身体に残るへへを塗りかえるものは描かない。残っているものと今見ているものとを繋いで、渡つていくような絵を目指したい。

へへは人生で無視してきたこと、普通のことの中に埋もれている。うつかり撮ったゴミが片付いていない写真、寝間着の写真を拾いあげ、今、絵の具で結びつけてみるような。乾きの遅い油絵具は都合がいい。一日の最初と最後の手とを、あるいはものとまわりとを混ぜてぐつと絡められる。そ

れは言いかえれば、絵の中の時間や空間をほぐすこと。たくさんのが生まれて少しづつ失われていく、現実の本質に触れるための私なりの方法だ。

こうして制作して暮らすうちに、私自身もほどけてゆくのを実感する。この先、ほどけた私がどんな絵を描けるか、まだ自分に期待できる。



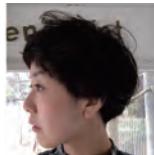
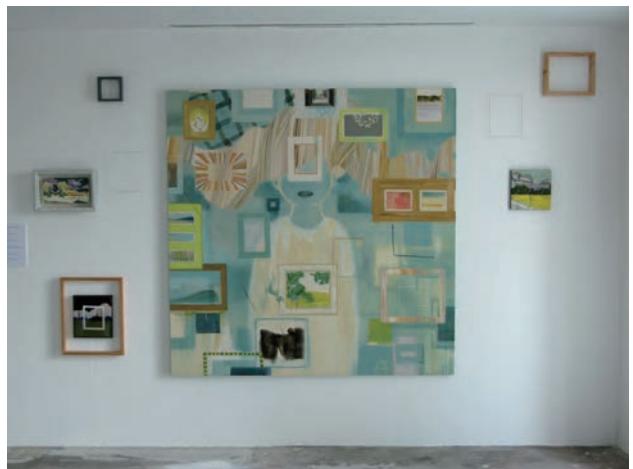
ほどけゆく岸

油彩、綿布、パネル

62.2×91.0cm

2013年

旅を満たす器 あるいは希釈するもの
(展示風景)
油彩、蜜蠟、鉛筆、
アクリル、綿布、パネル
145.5×145.5cm
2012年



古橋 香

1982年 東京都生まれ
2004年 筑波大学芸術専門学群美術専攻卒業
2007年 筑波大学大学院修士課程芸術研究科美術専攻修了

個展

2014年 Shonandai MY Gallery／東京(六本木) にて11月6日～11日迄開催予定
2013年 ほどけゆく山 山はわたし Shonandai MY Gallery／東京
2012年 近所の旅 橋画廊／大阪
2008年 スリーピング・スキン art project frantic／東京
2007年 理想の女の子 PUNCTUM Photo+Graphix Tokyo／東京
2003年 complex room gallery F／茨城

グループ展他

2014年 FINE ART / UNIVERSITY SELECTION 2013-2014 筑波大学総合研究棟 D.1Fギャラリー他／茨城
2014春 ～布石～ REIJINSHA GALLERY／東京
2013年 トーキョーワンダーオール公募2013入選作品展 東京都現代美術館／東京
Ongoing祭り Art Center Ongoing／東京('12)
Ongoing X'mas Art Center Ongoing／東京('11, '12)
2012年 SICF13 スパイアラル／東京
MOTHERS KOGANEI ART SPOT シャトー2F／東京
第18回うしく現代美術展 牛久市中央生涯学習センター／茨城('11)
2011年 BankART Artist in Residence 2011 BankART Studio NYK／神奈川
2010年 shirtsgenic with music! art works gallery／茨城
2009年 ヒトノカタチ art works gallery／茨城
前橋アートコンペライブ2009 受賞作品公開展示 前橋市役所／群馬
2008年 カフェ・イン・水戸2008 水戸市街地／茨城
横浜アート＆ホームコレクション展 横浜ホームコレクション／神奈川
ワンドーシード トーキョーワンダーサイト渋谷／東京('07)

「同じことを二度言う」こと

割と誰でもそうだと思いますが、そしていきなり語弊があるかもしれません、モチーフは結局何でもいいんじゃないとか思っています。例えばサルを描いてみたらすごくいい具合に絵の具が塗れたので嬉しいとか、サルの重要性はその意味的側面においてではなく契機としてそうでした、みたいことで、些細なことなんだけどそれがなければその絵の存在意義がないというような話ですね。絵の具の重要性はまさにこの部分にかかっていて、これは思想的なことやコンセプトで代替できるものではない。コンセプトなんかいらないって言つてるわけじやなくて両者が交換可能関係にないということです。パラレルにしか存在しない。だからといって「花に囲まれたハダカで美人」を描くかつていつたら描かないと、それは契機的な側面においてです。

僕の作品は意識的・無意識的を問わずに裏側に何らかのプロットが設定されていることが多い、実際ストーリー完全先行型の絵もあります。ただプロットを重視しすぎるところが絵として生まれ出される成り行きですね。「こ」とばが具体的だと見せかけて

を邪魔するという危険性もある。対話関係が外部依存になつてくると作品自体が疎外されいくというか。僕・作品・プロットという三者がいる場合、基本的には僕と作品が直接対話をするところにしか産道はないはずなんですが、僕・プロットというラインが強すぎる場合、作品がプロット参照型になっちゃつて、そうなるとマズい。マズいんだけど時々やつてしまふ。これはもう、生まれ育ちの問題で「言語」が介在しない状況があまりなかつたので、人のせいにしちゃいますけれども造形を造形として純化した形でやりとりするという経験があまりなかつたせいなんだろうと思います。

そうなるとどうしても言葉と造形の相互関係について考えざるを得ないんですが、その際、言葉の持つ抽象性がひとつのがれになってしまいます。トートロジーは実証主義的にはほとんど存在意義のない概念ですが、ところが文学的な側面から何らかの「真実」に接近を試みると、つまりこれになつちゃうんじゃないかと思う節がある。「ただ青い空の青さを知る」っていうやつですね。「こ」とばが具体的だと見せかけて

とことん抽象的であるということがやつぱり一役買つていて、トートロジーとは言い

で両立させていけたらと考えています。

ながら実際は最初の「青」と二番目の「青」はすでに意味が違つてきているわけですが、で、それはつまるところ見ているこつち側の問題になる、ということを示唆している。さらには「示唆していることに我々が気付く」という仕掛けになつていて。これは小さい

ようで大きいことだと個人的には思つていて、どうしてかといえば「私たちの意識によつて世界が変わる」という元来我々が密かに知つてることに実感を与える役割を果たすからです。これは世界の「構造」を変えるということとは射程の向きが違うので一緒に出来ませんが、世界変革に直接関わるという体験可能性が、論理的な正否とは全く別次元で「自己存在の肯定性」を獲得する重要な意味を担つていてと思ひます。

美術を含めた説明言語外系ジャンルが位置しているのがおそらくこの「自分が直接世界変革と関わる」分野ですが、僕個人的にはトートロジーを一つの方法的な共通項と見た上で「ことば」と「絵画」をどこか



父さんのことなら、心配いらない。

油彩、キャンバス

130.3×162.0cm

2013年

環七
油彩、キャンバス
162.0×162.0cm
2012年



村山之都

1969年 北海道生まれ
1992年 早稲田大学第二文学部社会学専修卒業
2001年 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2003年 武蔵野美術大学大学院造形学研究科油絵コース修了

個展

2009年 Shitsu Murayama Exhibition 新宿眼科画廊／新宿
2005年 村山之都展 札幌時計台ギャラリー／北海道

グループ展他

2013年 上野の森美術館大賞展 上野の森美術館／東京 ('10~'12)
Ezotic Art 東京都美術館／東京
FINAL COUNT DOZEN Gallery DOZEN 18／東京
かなた Art Circulation 小樽市美術館市民ギャラリー／北海道 ('10~'12)
えねるぎい ふお あす 代官山ヒルサイドフォーラム／東京
Exhibition Scarb あかね画廊／東京 ('06~'12)
Reunited展 府中美術館ギャラリー／東京 ('10~'12)
Japanese Emerging Artists Browse & Darby／ロンドン [イギリス]
2012年 画材から見るそれそれのかたち 上野の森美術館／東京
上野シノバズリィ 上野の森美術館ギャラリー／東京 ('10)
Magnetic Field Resonance=磁場共鳴=GALLERY YUKI-SIS／東京
2011年 Art Factory マキイマサルファインアーツ／東京
空間は記憶する。 NICHE GALLERY／東京
nomadic circus troupe 北海道立近代美術館ギャラリー／北海道
イメージの広がり デザインギャラリー／北海道
2010年 ピエンナーレうしく 牛久市中央生涯学習センター／茨城
2008年 Art & Photo Book Exhibition 新宿眼科画廊／東京
2006年 Gelände ギャラリーアートもりもと／東京

出会いの必然性

己の制作スタイルを、Reanimation（蘇生）と称し、パロディやサンプリングなどの手法を抛り所にして、古典芸術と同時代の文明に着眼し、その融合を試みています。そして、社会を嘲笑的に表現することを目指的として、アイロニーに満ちた物語を描き、絵画表現として、ユニークな形態を目差しています。

幼い頃の私は、よくアニメを見て過ごしましたが、当時、ロボットアニメや特撮系が、男子達の心をキャッチする中、個人的には、「世界名作劇場」という番組が好きでした。特に「小公女セーラ」という作品は、子供の私に、大きなショックを与えました。脳裏に焼き付いていたのでしょうか、最近また見たくなり、DVDのセットを、大人買いしてしまいました。執拗かつ陰湿ないじめの描写が、当時子供向けアニメ番組としては、新しい感じでした。

この物語の主人公セーラは、純朴で気丈で心優しく、聖人のような女の子です。親元を離れ、勉強のためロンドンのミンチン女子学院に入学した後、突然、父親の病死をきっかけに、様々な試練がセーラを襲いま

す。セーラに身寄りも財産も無くなつたと判断した学院側は、今までの阿附迎合の態度を一変させ、彼女のプライドなどお構いなしに、まるでボロ雑巾を踏みにじるが如く、奴隸のように扱います。彼女への試練に、因果応報的因素は存在しません。

さて、改めてこの作品の文脈をたどり検証したところ、旧約聖書最大の傑作と言われている「ヨブ記」という一節に出会いました。「ヨブ記」の主人公ヨブは、いわゆる聖人君子とされる人物ですが、サタンに唆された神に、理由なき試練を、次々と与えられます。しかし、ヨブは、幾多の試練を乗り越え、最後まで神への信仰を捨てないのですが、この話によると、どうやら、ヨブの絶対的な信仰心への称賛物語と、読み解けるだけではなく、実は、旧約律法の勸善懲惡や、因果応報論の批判もあつたり、理路整然とした内容に関心を持ちました。

聖書と出会つてからというもの、その世界觀を作品に反映させるべく、制作を行っていますが、現在の制作を通して、人間の運命について考えたりすることがあります。近年、被害が顕著になつてゐる自然災害や、

戦争の殺戮によつて犠牲となつてしまつた人々は、襲いかかる不条理を予測出来ていなかつたでしようか。誰もが、想定出来ないような出来事だつたと思います。福島原発の事故に象徴される、重厚長大の機械文明が壊れようとしており、不透明で不安定な社会に入つてしまつています。その中から、新しい胎動、新しい時が予感されます。ちょうどビルネサンス時代のように、また、イエスキリストの時代のように、死の苦しみ、生みの苦しみを伴うと考えます。これは、何か神の下した仕業のようにも思えてなりませんが、良くも悪くもこの世の出来事は、確立変動で起こり、生きることは、万人に美しくもあり、リスクもあるのだと、改めて実感します。

私の制作の源泉は、古今東西、人間の喜怒哀樂など、様々な出会いを通じて得られているのだと自負していますが、その出会いに、必然性みたいなものを感じています。自分の思惑を超えて幸福や不幸があり、その巡り合わせの中で発生する情報は、とても貴重なものです。日常の連続性に、平和ぼけすると、多くのことを犠牲にしてしま

うような気がするので、怯えることはないけれど、少しくらい危機感を持つて、一日一日を大事にしたいし、たくさんの出会いによつて、自分は生かされているのだということに、感謝しながら、制作を続けたいです。



Doctors

メリキ、UV硬化インク、ウレタン、油彩、
アクリル、アルミハニカムパネル
116.7×116.7cm
2014年

お気に入りの場所
ウレタン、油彩、アクリル、キャンバス
145.5×112.0cm
2010年



森 洋史

1977年 東京都生まれ
2000年 東海大学教養学部芸術学科美術学課程卒業
2013年 東京藝術大学大学院修士課程美術研究科修了

個展

2014年 木之庄企画／東京（八重洲）にて10月開催予定
2013年 「移城浮光」 Art Experience Gallery／香港【中国】
2011年 Shonandai MY Gallery／東京
2010年 木之庄企画／東京

グループ展他

2014年 I氏コレクション展 阿久津画廊／群馬（'12、「13）
「見ること・描くこと」 油画技法材料研究室とその周縁の作家たち 東京藝術大学美術館・陳列館／東京
2013年 シブヤスタイルvol.7 西武渋谷店美術画廊・オルタナティブスペース／東京
現代アート展III -新しい世代の作家達- 阿久津画廊／群馬（'12）
INTRO-コレクター山本冬彦が選ぶ若手作家展- The Artcomplex Center of Tokyo／東京
ポートレートジャム：ヒューマンズ・ウィーアー アキバタマビ21(3331 Arts Chiyoda)／東京
三菱商事アート・ゲート・プログラム 三菱商事ビル／東京（'12）
第61回東京藝術大学卒業・修了作品展 東京藝術大学美術館、大学構内／東京
2012年 雙彩虹 -森洋史・李碧慧聯展- Art Experience Gallery／香港【中国】
第7回タグボートアワード入賞者グループ展 IN 台湾 AKI Gallery／台北【台湾】
2011年 SHORT+SHORT 東京藝術大学構内／東京
シェル美術賞展2011 代官山ヒルサイドフォーラム／東京（'09、「10）
奏でる鼎展 ギャラリーしらみず美術／東京
ASYAAF 2011 ホンクイ大学現代美術館／ソウル【韓国】
第4回アーティクル賞入選者展覧会 TURNER GALLERY／東京
東日本大震災チャリティー展 The Artcomplex Center of Tokyo／東京
Next Art 展 朝日新聞東京本社、松屋銀座／東京
Resonance Effect -共鳴効果- 木之庄企画／東京
2010年 GEISAI TAIWAN#2 華山創意文化園區／台北【台湾】
WONDER SEEDS 2010 トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
Prologue VI Gallery Art Point／東京
第28回上野の森美術館大賞展 上野の森美術館／東京

わにぶちみき

WANIBUCHI Miki

Boundary Line

わたしは境界線を描いている。画面を覆う白を、観る人と、絵の向こう側を隔てる境界として。それはちょうど自己と世界、人の内と外を分けるような、境界線。その向こうに見えるもの、それは観る人自身の経験や常識に裏づけられたもので、作家自身の思い、描いたものがそのまま伝わるわけもありません。けれど、それでいい。わたしの作品は、観る人によって見え方が違うということを許容しています。つまり、そこには他人との違いを理解する必要性も生じてくる。

他人を知ること、世界を知ること、そのときに意識せざるを得ないもの。ファイルターのように目の前を覆つていた自分だけの価値観や常識を知覚したとき、はじめて本当の意味での外界を知ることができるのではないか。そしてそれは、自身自身を知ることにもつながる。タッチパネルの向こう側に見える膨大な情報を見つ受ける現代ですが、ゆびさきの動きひとつで簡単に世界を知つた気になるわたしたちのことを、ときに恐ろしく思うことがあります。

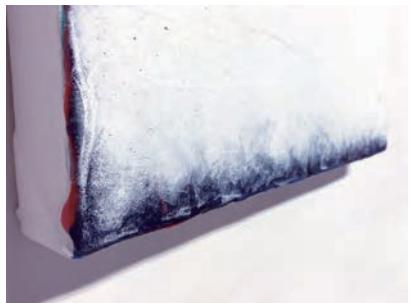
わたしたちの感覚は、この刺激の溢れるます。本来「知ること」とはそんなに簡単なものではないのでしょうか。白の隙間からのぞく色、下からにじみ出すテクスチャ、キャンバスのエッジに残る色の重なりの痕跡。観る人がまず期待することしか提示されていません。作家の情緒の不在、イメージの再現を手放したわけですが、それは絵の具とキャンバスという物質||オブジェクトとしての側面を意識せざるを得ない状況を作ろうとする意図があるからです。そして白い面の向こう側、言い換えれば表面とキャンバス枠との間にクローズアップしていく、この部分が作品の主題です。キャンバスという一個のオブジェクトから絵というイメージになるまでの境界線。そこに作者としての意識と根拠が秘められていることに注目してもらいたい。そしてそのことが結果、観る人の思考力や想像力を刺激するものになることを期待します。

社会のなかで、逆に麻痺してしまっているかもしされません。けれど、そんな世の中であえて静かな絵を提示し、観る人それぞれのもつ想像力に語りかけることに、わたしは挑戦していきたい。それが相手を知ろうとすること、世界を知ろうとすることにつながり、そして、世界を救うようなちいさくても優しいちからを生むと、わたしは信じている。



TANESASHI 2013-11
アクリル、キャンバス
40.0×40.0×3.0cm
2013年

TANESASHI 2013-11 (部分)





Boundary Line
アクリル、キャンバス
各145.0×55.0cm
(5枚組み)
2012年
photo by Cecilia Sá Pereira

わにぶちみき

1981年 大阪府生まれ
2004年 近畿大学文芸学部芸術学科造形美術専攻卒業
2012年 英国ボーンマス芸術大学大学院美術修士課程修了

個展

2014年	Touch the boundary	Contemporary Art Gallery Zone／大阪(箕面) にて10月開催予定
2013年	Touch	gallery CLASS／奈良
2012年	BOUNDARY LINE II	AUB Studio 4／ボーンマス[イギリス]
	BOUNDARY LINE	AUB Studio5／ボーンマス[イギリス]
2011年	sora-no-iro ku-no-nioi	SoHo art gallery／大阪

グループ展他

2014年	No.16芸術の存在意義「展」	アートイマジン／東京
	gallerism	京阪シティモール／大阪
	21世紀女性アーティスト展7	ESPACE CULTUREL BERTIN POIREE／パリ [フランス]
	ヤングクリエイターズセレクション2014vol.1	MI gallery／大阪
	TRANSNATIONAL ART	大阪府立江之子島文化芸術創造センター／大阪('13)
	2014春～布石～	REIJINSHA GALLERY／東京
2013年	Doors Art Fair	インペリアル・パレスホテル／ソウル[韓国]
	Emerging Directors Art Fair - ULTRA 006	スパイラルガーデン／東京
	「近大芸術 inあべのハルカス近鉄本店」展	あべのハルカス近鉄本店／大阪
	箕面の森アートウォーク2013／実行委員	明治の森箕面国定公園／大阪
	新しい眼—若手作家の挑戦状—	国立新美術館／東京
	PRISM 2013	Contemporary Art Gallery Zone／大阪
2012年	drawing exhibition act.3	ギャラリー空／東京
	dust - Postgraduate Show 2012	AUB／ボーンマス[イギリス]
2011年	art for Lifeline	ギャラリー空／東京
	TRANSNATIONAL ART	大阪府立現代美術センター
2010年	日本人作家招待展示	Rufus Lin Gallery／リッチモンド[カナダ]
2009年	現代美術インディペンデント CASO展	海岸通ギャラリーCASO／大阪('08)

The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊2014

発行日 2014年7月1日発行
定 価 1,000円
発行所 ホルペイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
発行人 川見良夫
編 集 倉田妙子

